
IS～インフィニット・ストラトス～蒼き月の輝き

曾良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス）蒼き月の輝き

【Nコード】

N7412W

【作者名】

曾良

【あらすじ】

遠い昔の記憶・・・ダイヤの形を模したネックレス・・・少女は言った

「ずっと一緒にいるためのものだよ」と・・・

IS、女にしか動かせないそれをうごかした男子がいた。ひとりは、織斑一夏。もうひとりとは結城海斗、だが結城海斗にはある秘密があった？

第1話プロローグ（前書き）

初投稿なのでおてやわらかに

第1話プロローグ

遠い昔の記憶・・・・

「これ、なに？」

自分の首にかけられているダイヤを模したネックレスを見下ろしながらいった。

どこにでもありそうな普通の公園、そこに俺はいた。その公園はいつも人ひとりいない。いるとすれば俺とひとりの少女だけ・・・・

ひどく美しい少女、オレンジ色の長い髪に、白い肌。

ちよっと吊り上った髪の色と同じオレンジの目。

まるで、妖精を想像させるかのような美しい少女だった。

その少女は悪戯ばい笑みを浮かべながら

「あなたとずっと一緒にいるためのもの」

「ずっと一緒に？」

幼い俺にはまだわからなかったけど、だけど、彼女と一緒にいられることはうれしかった。

そんなことを考えていると彼女が不安そうな顔で覗いてきて

「それとも私とずっと一緒にいるのは・・・嫌？」

「嫌じゃないよ」

と俺は答える。

「じゃあ・・・好き？」

なんてことをいつてくるので俺は

「え・・・えっと・・・」
って言ってしまう。

すると、彼女は

「あなたは私のこと・・・嫌いなのか？」
泣きそうな顔で言ってくるので

「ち：違うよ、嫌いな訳ないじゃないか」

「じゃあ・・・私のこと好きなの？」

「え？・・・うん・・・好きだよ」

すると、彼女は子供とは思えない妖艶な笑みを浮かべて

「私も好きだよ・・・海斗」

俺は彼女の笑顔が大好きだった。俺も微笑む、そして、

「僕もだよ・・・マリア」

と、言おうとして・・・

季節は春、桜がちらほら咲き始めているころ、どこの高校も入学式があつてるところだ。
で・俺はというと

「ここがIS学園か」

今、俺はIS学園のゲートの前にいる。

「しかし、でかいよなこのゲート、なあ、紅葉？」

「ほんとだな・・・って、今更そんなこと言っても意味ない」

「それはそうだけど」

予想外のつつこみに戸惑いながらも改めて3年間通う学校をみてる

アイエス

IS 正式名称『インフィット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。しかし、『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた。

そして、IS 学園はIS 操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また、黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また、当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務づける。また入学に際しては協定参加国の国籍持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。という学園なわけだ。

「そんなことより、いつまで話しているつもりだ」

「千冬姉さん！？・・・いつのまに？」

「ずっと前からだ・・・それにここでは織斑先生と呼べ」

このひとは織斑千冬、俺の義理姉だ。

「そんなことよりそろそろ・・・」

紅葉が待ちくたびれたように言うと

「そうだったな」

というと、ゴホンッと咳払いをして

「こっちだ、ついてこい」

そういうと千冬姉さんは早歩きでいってしまおうとするのでそのあとを追いかける。

「めんどくさいのは嫌いなんだがな」

はぁと大きなため息ついてしまう。

「ため息なんてしたら幸せがにげるぞ」

と、紅葉のつつこみにまた、はぁとため息をつく。

そう言っていたらすぐ教室の前についてしまった。

（まあ、たまにはがんばってみるかな）

なんてことを考えながら教室のドアを開けた。

第1話プロローグ（後書き）

ここまで読んでくれたかたありがとうございます。
次回もよろしくおねがいします。

第2話 再会（前書き）

2度目の投稿です。最後まで見てくれたらうれしいです。

第2話 再会

はあくっと大きくため息ついているのは、世界で最初に男性でISをうごかした（というよりはいまのところISを動かせる男は2人だけなんだが）織斑一夏だった。先ほどの自己紹介で千冬の出席簿で頭を殴られ、しかも、いまこの教室にいる男子は一夏だけなので女子からの視線がすごい。

（これは、想像以上にきついな）

と、内心で言ってみるも状況はまったくかわらない。先ほどから6年ぶりに再会した幼馴染の篠ノ之箒に救いの視線をおくっているのだが何度も目をそらすのだ。

（薄情なやつだな）

なにかしたかな？そんなことを考えていると、いつのまにか自己紹介は終わっていた。

「おい、入ってこい」

千冬ねえ・・・織斑先生が合図をすると教室のドアが開き入ってきたのは・・・

「か・・・海斗なのか!？」

と言い立ち上がる、

「おお、一夏久しぶりだな、2年半ぶりだな」

織斑一夏と結城海斗は海斗が千冬に拾われて以来家族同然のように育ったのだ。

しかし、中学1年の冬休み突然行方がわからなくなっていた。

「元気だったか？」

「当たり前だろ、おまえの方は元気だったか？」

「おお、風邪もひいてないぜ」

一夏と海斗が感動？の再会している途中で・・・

「馬鹿どもそこまでにしろ・・・海斗は自己紹介をしろ」

鬼や魔人とも呼ばれる（一夏と海斗にだけ）織斑千冬がそう言っているのとおとなしく従う。

「えーっと・・・結城海斗です、よろしくお願いします」

といい終わると一夏と紅葉、千冬を除くクラス全員がずっこけた。まるでなにかのコントを見ているようだった。

「紅葉、なんでみんなずっこけてんだ？」

「さあ、私に聞くな」

一夏も意味が分からないらしくキョトンしている。そして、織斑先生は頭抱えていた。

「もういい、次」

これ以上続けるとどうなるかわからないのでそこで話を終わらせた。

「日向紅葉だ、これからどうぞよろしくお願いします」
ひなたもみじ
こがねいろ

髪は黄金色のミディアム。身長はおれよりやや低めだ。美人といえば美人なのだが、天然なのが玉にきずなんだよな。

そんなことを考えているとチャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ、これから諸君にISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後は実習だが、ISの基本動作は半月で体

染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

鬼だな……。いや、鬼のほうがましか。なんせ目の前にいる人を見たら鬼や悪魔でさえ逃げ出すだろう。なにせこの織斑千冬は第一世代IS操縦者日本代表なのだ。しかも、公式戦は全勝無敗。ところが、ある日突然引退した。

「席につけ、馬鹿ども」

はいはい、馬鹿ですよ。

「あーやばい、駄目だ」

「全然わからん」

上から、一夏、海斗の順だ。

1時間目のIS基礎論理授業がおわって今は休み時間。

（しかし、なんとかならないのかな、あれ）

海斗の視線先には廊下に詰め寄ってる女子たちがいる、ISは女しか使えないはずだがなぜか男である、織斑一夏と結城海斗は起動させてしまったのだ。『世界で唯一ISを使える男子』というニュースは全く間に世界中に広がった。もちろんこのIS学園も例外ではない、そのため廊下には1年だけではなく2年、3年生も詰め寄っている状況だ。

「なあ、海斗」

呼ばれたのでそっちを見る

「紅葉ってさ・・・お前の彼女？」

どこかで爆発音がしたが気のせいだよな・・・

「ちげえよ」

当たり前みたいにかえした。

ゾクッ、なぜか紅葉の方から殺氣したんだが・・・なんでだ？

「ちょっといいか？」

「うん？・・・箒か！久しぶりだな、元気だったか？」

「ああ、海斗の方も元気でないよりだ」

目の前にいたのは6年ぶりに再会した幼馴染の篠ノ之箒だった。

箒は、俺と一夏が通っていた剣道場の子。髪型は昔から変わらずポニーテール。肩下まである長い髪を結っているリボンの色が白なのはやっぱり神主の娘だからだろう（篠ノ之道場は神社兼任）身長は平均な女子のそれだが、長年剣道で培われている身体はどこか長身を思わせる。

「一夏に用なんだろう？」

「あ・・あああ」

そうとう一夏と箒とは廊下においてしまった。

「・・・であるからして、ISの運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を遺脱したISを運用した場合は、刑法で罰せられ・・・」

すらすらと教科書を読み上げているのは、クラス副担任の山田真耶

だ。身長はやや低め、生徒のそれと変わらない、しかも、服のサイズが大きいせいからだぼつとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁メガネも若干ずれている。一夏曰く『子供が無理して大人の服を着た』的な、不自然さらしい。

「織斑君なにかわからないことがあったら言ってくださいね」

一夏の会話が聞こえたらしくわざわざ訊いてくる。

すると、一夏は何か決心をしたみたいで、

「全部わかりません」

「え！？ぜ・・・全部ですか」

ほかにわからない人はいますかという問いにたいしておれは、

「俺も、全部わかりません」

教室の端にいる千冬は、

「織斑、結城、入学前の参考書はよんだか？」

ふたりは目の前にうる人物からはにげられないと思い覚悟を決め、

「古い電話帳と間違えて捨ててしまいました」

「滑って、川に落としました」

上から、一夏、海斗の順だ。

パンツッ！！

出席簿のいい音が教室に響いた。

第2話 再会（後書き）

どうでしたか。感想、アドバイスなどがあつたよろしくお願いします

第3話 セシリア・オルコットVS織班一夏（前書き）

どうも曾良です、今回はセシリアが登場です。

第3話 セシリア・オルコットVS織斑一夏

時は、2時間目の休み時間、世界でISをつかえる男子、織斑一夏と結城海斗は頭を抱えていた。理由は、少しさかのぼること数分前・

パンツ！！！！

出席簿で殴られ後、

「あとで、再発行してやるから一週間以内で覚えろ、いいな！」

なんてこと言われた、そこに一夏が、

「い、いや、一週間であの厚さはちよつと……」

「やれと言っている」

「・・・・・・はい。やります」

ギロツと一夏を睨む目はまるで、鬼軍曹ともいうべき目だった。その後、千冬姉さんの規則とはの講義などがあり色々と疲れた。

「ちよつと、よろしくて？」

一夏は話しかけてきた相手を見た、そこにいたのは地毛の金髪が鮮やかな女子だった。

白人特有の透き通ったブルーの瞳が、やや吊り上った状態でみていた、その女子の雰囲気は『いかにも』今の女子という感じだった。

今の世の中、女性はかなり優遇されている。理由はISにある。ISはどの既存する兵器よりも遥かに優れている、しかも、そのISを動かせるのは女だけ、当然のようにどの国も女性待遇をよくするようになり、結果的に女性⇨偉いという構図ができてしまった。

「ちょっと、訊いてますの、お返事は？」

「あ・・ああ。訊いているぞ、どういう用件だ」

一夏がそう答えると、その女子はわざとらしく声をあげ、

「まあ！なんですのそのお返事わたくしに話かけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのではないかしら」

「・・・」

正直このタイプは嫌いだな俺。

「悪いな正直君のこと知らないし」

そんな、女子は一夏の言葉に驚いている顔だった。

「海斗はしってるか？」

「しらねえな」

一夏の問いかけに正直に答える、俺はみんなが自己紹介が終わった後に入ってきたからしょうがないだろ。

（一夏が知らないのはおかしくないか？）

そんな、つつこみをいってると、

目の前にいる女子は気に入らない様子だったようで、吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生でありながら入試主席のこのわたしくしを！？」

セシリアか・・・覚えるか・・・

「あ、質問いいか？」

一夏が続ける、

セシリアはよろしくてよといい一夏の質問にこたえる準備をした。

「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳をたてていた女子数名がずっこけた。

「一夏、それはさすがに知らなさすぎだろ」

ゆっくり眺めていた俺は思わずツツコんでしまった。

それで、セシリアはというと・・・

「あなた、本気でおっしゃてますの？」

すごい剣幕だな、血管マークが出てるぞ。

「おう、知らん」

俺の認識が甘かった。まさか、ここまでとは……………

「一夏、代表候補生っていうのは「国家代表IS操縦者の候補生のことですわ」割り込むなよ」

海斗が喋ろうとしたらセシリアに邪魔されてしまった。

「つまり、エリートですわ！」

復活はや！！さすがだな代表候補生。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを一緒なるだけでも奇跡……………幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

それに一夏は……………

「それは、ラッキーだ」

「馬鹿にしていますの？」

セシリアさん、ごもつともだ。この馬鹿にはもつと教育しなければ。

「大体、あなたISのことについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いてましたから、少しくらい知的さを感じさせるかとおまってましたけど、期待外れですわ。」

「それって、俺も含めているの？」

セシリアの言葉に反応した海斗が質問すると……………

「あたりまえですわ！」

（なんで俺もなの？）

他の人から見たら海斗は一夏と同じレベルに見えていることを本人は知らない。

「まあ、ISのことでわからないことがあったら教えてあげてもよ
つくてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒した、エリート中の
エリートですから。」

何故か、妙に唯一のところが強調されているんだが。

「入試ってあれか？IS動かして戦うやつ」

「それ以外入試はありあせんわ」

「ああ、あれ俺も教官倒したぞ」

一夏の発言にセシリアは、目を大きく見開いて驚いている。

「わ……わたしくしただけだと聞いていましたけど？」

「女子ではって落ちじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと・・・」

「いや知らないけど」

「あなた！あなたも教官をたおしたと言うの？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん！？たぶんってどういう意味かしら」

あまりにもセシリアが怒っていたので一夏は、

「えーと？落ち着けよ。な？」

「これが落ち着いていられ・・・」

キーンーコーカーン。

話に割って入ったのはチャイムだった。

「っ・・・！またあと来ますわ！逃げないことね！よくった！？」

なんか大変なことがおこっているが俺には関係ないな。
ガラッ！

ドアから千冬姉さんがはいつてきて授業がはじまった。

第3話 セシリア・オルコットVS織斑一夏（後書き）

今回は海斗と紅葉はなにもしなかった・・・。

感想などありましたらよろしく願います。

オリジナルキャラ設定（前書き）

ここで、オリジナルキャラの設定をだしておきます

オリジナルキャラ設定

名前 結城海斗

身長 171cm

性別 男

好きな食べ物 ご飯にあうもの

嫌いな物 チョコレート、コーヒー、ココア

趣味 読書、散歩

髪は空の色に近い青色で、長さは肩までである。幼いころ千冬に拾われ、家族同然のように育てられた。

千冬に拾われる前から持っていたダイヤの形を模したネックレスを大事にしている。千冬に拾われる以前の記憶がない。

中学時代は一夏や弾と遊んでいた、鈴とは犬猿の仲であり、よく喧嘩をしていた（だが、仲が悪いわけではない）

家族や友達が傷つくことを極端に嫌っている。

中学1年の冬休みに家を出て行ったきり連絡がなかった。

旅途中で紅葉と知りあった、それ以来行動をともしていた。ISの研究施設に行ったとき、謎のISの襲撃を受け、その際たまたま近くにあったIS『蒼月』^{そうげつ}を起動させてしまった。

専用IS 蒼月

待機状態 ブレスレット

世代 第4世代

外見は青を基準とした装甲で黒のラインが入っている、背中には四つの高出力推進翼があり、内側にプラズマ集束砲が備わっている。また、腰の部分には電磁レール砲が搭載されており、普段は三つ折りの状態で装備されている。

開発途中で欠陥機として放置されていたところを海斗が起動させて、そのまま専用機になった。

最初は新型ISとして開発していたが、追加装備の研究が進まず断念された。

燃費が悪く、装備が少ないため使いこなすには操縦者の技量次第である。

武装

・プラズマ集束砲『雷電』

高出力推進翼に2門装備されている。蒼月最大の火力を誇るが、そのため蒼月の燃費の悪さに拍車をかける結果となってしまった。

・電磁レール砲『雷砲』

腰部に2門装備されている。小口径の弾丸を高速で打ち出すことで火力は落ちるが、連射が可能となり敵を同時攻撃ができる。また、雷電と組み合わせられることで一撃でシールドバリアーを突破することができ、シールドエネルギーをつかって攻撃するためもろ刃の剣である。

・『蒼鬼』

刀剣の形をした蒼月の主力武装。他の武装が火力が強く大量のエネ

ルギーをつかうため実戦ではほとんどの蒼鬼をつかっている。

オリジナルキャラ設定（後書き）

なんか、フリーダムとかぶっちゃったけど、そのところは勘弁してください。

誤字脱字などがありましたら教えてください。

第4話 クラス代表は誰？（前書き）

主人公はなにをやってるんだろう。

話がなかなか進まない・・・

第4話 クラス代表は誰？

「それではこの時間では実戦でも使用する各種装備について説明する」

1, 2時間目とは違い山田先生ではなく、千冬姉さんが教壇に立っている。山田先生は教室の端でノートをとっている、よほど重要なことらしい。

「ああ、そういえば再来週のクラス対抗戦でる代表者を決めないとな」

ふと、思い出したように千冬姉さんがいった。

「クラス代表とはそのままでの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会が開く会議や委員会への出席など・・・まあ、クラス委員と思ってもらってもかまわない。一年間変更はないからそのつもりでいろ」
俺は死んでもやりたくないな。

「はい！織斑君を推薦します。」

よし、このまま一夏になってしまえ・・・

「私は結城君を推薦します」

え〜〜〜〜！？なんで俺なの？

「では、候補者は織斑一夏、結城海斗・・・他にはいないのか、自己推薦でもかまわないぞ」

「え？お、俺！？」

一夏は驚いたような顔で立ち上がったが・・・

「織斑、邪魔だ席につけ……推薦されたものに拒否権はない覚悟しろ」

まじかよ……くそ誰か立候補してくれ!!

「ま、まってくださいそんなの納得いきませんわ」

そういつて立ち上がったのは先ほどの金髪の女子だった。

(名前なんだっけ?)

一夏と口論していたときは、無視していたから全然覚えてなかった。

「そのような選出は認められません。大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ、私、セシリア・オルコットに1年間そのような屈辱を味わえておしゃるんですか!？」

立候補したのはいいが、なんかむかつく言い方だな。

「いいですか、大体、クラス代表というのは実力がある方の役割でしょう」

それもそうだな。ちよつとはいいいこと言うじゃねえか。

「実力でいえば私が代表になるのは当然です。それを、物珍しいからって言うって、極東の猿にされては困ります。わたしはこのような島国にまでISの鍛錬をして来たのであって、サーカスをするきほもつとうありません」

猿って・・・俺と一夏、どっちなのかな？

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないだけでも苦痛だと――」

カチン。

「イギリスだってたいしてお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

やっぱ一夏は我慢できなかったか・・・

一方、セシリアは・・・顔を真っ赤にして髪の毛が逆立ってもおかしくない表情だ。

「あ、あなた私の祖国を侮辱しますの？」
もうこなってしまったものは戻らない。

「決闘ですわ！」
なんか、すごいことになったな・・・

「おう。四の五の言うよりわかりやすい」
まあ、話が進むのはいいが俺はどうなったの！？
そんな海斗の心の声は誰にも届いていない、すると、教室中から笑いが起こった。

「織斑君、男が女より強かったのはISができる前までだよ」

そんな声がどこからか聞こえてくる、どうやら一夏がハンデがどれくらいいるかきいたらしい。

たしかに今の世界ISを使えない男は圧倒的に弱い、もし女と男で戦争したならば、男は3日ももたない、それどころか3時間で制圧されるだろう。

「ハンデはいい」
一夏もあきらめたみたいだ。

「ええ。そうでしょうそうですね。女より男が強いなんて日本の男性はジョークのセンスがあるのね」

さっきまでの激昂はどこにやら、あきらかに嘲笑を浮かべている。

「ねえ、織斑君、いまからでもハンデつけてもらったら？」

「男が一度いったことは覆せるか」

一夏のやつ完全に頭にきているな・・・

「さて、話は決まったな。それでは勝負は一週間後の月曜放課後、第3アリーナで行う、織斑とオルコット、結城は準備しておくように、結城はそれでいいな」
この空気は行くしかないだろうっていうか行かなきゃ殺される。

「はい、それでもかまいません」

「よし、それでは授業を始める」

（結局のところ俺もかよ・・・）

でも久しぶりにがんばってみるか。
そこで俺は教科書を開いた。

「やっぱ、全然わからん」

放課後、俺と一夏は机にうなだれていた。

「教科書は意味が分からん、なんでここまで難しいんだ？」

「俺もさっぱりだからわからん」

教室には何人かの生徒が小声で話している、昼休みは地獄だった。俺と一夏が移動するたびにかなかの群れのごとくついてくるのだ、はつきり言って疲れた。

ちなみに、紅葉と箒はもう教室にはいない。

「織斑君、結城君、まだいたんですか。よかったです」
そういつているのは副担任の山田先生だ。

「寮の部屋割が決まりましたので、あ、これは鍵です」
山田先生が言うには、事情が事情なので、急きよきまった部屋らしい。二人は別々の部屋鍵を受け取ると、

「じゃあ、荷物をとりに帰りますか」

「おまえたちの荷物ならもう手配した」
そこには、千冬姉さんがいた。

「まあ、生活必需品だけでいいだろ」
言い訳はないだろう！さすが姉さん・・・

「えーと、ここが俺の部屋か」
一夏と別れた後、山田先生からもらった鍵で自分の部屋に入ろうと・・・

「ドアが開いていているんだが・・・なんでだ？」
特に気にすることもなく部屋にはいると、

「おー、やっぱすげえな」
部屋には高そうなベッドが2つ並んでいる。いかにも高級ホテルという感じだ。おれはベッドに飛び込む、この感触・・・なんともいいがたい、そんなことを考えていると・・・

「誰か、いるのか」

扉越しに聞こえるその声を聞いたとき、何故か嫌な予感がした、シヤワー室からでてきたのは・・・

「・・・・・・海斗!？」

「・・・・・・紅葉?」

何秒間かの沈黙のあと、

「っ! 見るな!」

そういう体を隠すようにことらを見ている。ちなみに、紅葉の格好はバスタオルをまいただけの格好でかなりやばいかった。

「えっと・・・ははは」

なにを言っているのかわからずとりあえず笑ったがまったくもって効果がない・・・

「・・・・・・で・・・い・・・」

「なにかいったか?」

「うりゃーーーーー」

紅葉はそのままとび膝蹴りし、それを顔面にくらってしまふ。そのままの勢いで俺は部屋から追い出された。

「いてえ〜」

俺は、先ほど紅葉からキックをもらった場所をさすりながら一夏の部屋へと歩いていった。

『あと、すこしは戻ってくるな』

と言われてしまい、やることのないから一夏のどこへ暇をつぶしに行くところだった。

一夏の部屋の前に着きノックしようと・・・・・・・・

バタン！

いきなり一夏が飛び出してきた、

ズドン！

扉をつきやぶって木刀が俺の頭に、命中した。

「またかよ・・・・」

ガクッ・
そこで俺は気絶した。

第4話 クラス代表は誰？（後書き）

海斗は不幸だな。

感想などがあつたらどんどん送ってください

第5話 寮での悲劇（前書き）

あいかわらず主人公はなにやってんだ？

第5話 寮での悲劇

「こ、ここはどこだ」

時は夜、ついさっきまで紅く染まっていた空はもうすっかり漆黒に染まっていた。

「目が覚めたか・・・」

そこには、紅葉が気まずそうに立っていた。

「その・・・なんだ、さっきはごめんなさい」

俺はいきなりの謝罪に驚いて声も出ない。

そもそもなんで俺はこんなところにいるんだ？

俺はついさっきまでの記憶をさかのぼってみる、

（たしか、紅葉に追い出されて、それから・・・一夏の部屋にいて・・・）

それからの記憶がない、気が付いたらここにいた。ちなみにここは保健室だ。

「俺は・・・」

「おまえは、一夏の部屋にいったとき、箒の木刀での一撃をくらって気絶したらしい」

木刀で！？どうりで頭が痛いはずだ。

「よいしょっと」

俺はひととおり話を聞き終えると、ベットから降りる、

「もう、大丈夫なのか？」

「ああ、元々たいした怪我じゃないしな」

そういつて、保健室をでようとして、ふっと時計を見たら・・・

「げっ！もう7時ギリギリじゃないか！」

「あ、待て私も行く」

紅葉と急いで食堂に向かう、なぜ急いでいるかというと、単に食堂の時間が7時までなのだ。

「食事抜きだけは勘弁だからな」

ものすごい勢いで食堂ではしっていく海斗はまるでセリヌンティウスを救いに行くメロスみたいだったと紅葉は後に語った。

「なあ、いつまで怒ってんだよ」

今は朝の8時。1年生寮の食堂だ。

「なあって、箒」

「………怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうだから」

「顔は生まれつきだ」
にべもない。

一夏は『同じ部屋』のよしみでこうやって箒と朝食をとっている。

なんで箒が不機嫌なのかは昨日にさかのぼる……

一夏は海斗と別れた後、自分の部屋にいくところだった。

「えーと1025室は……ここか……」

鍵の番号を確認してから部屋に入る……あれ？開いてるじゃん。

ガチャ。

まず目に入ってきたのは大きめのはベット。それが2つ並んでいる。そこいらのビジネスホテルより高いに違いない。こう見えているだけ

にはふわふわ感を醸し出している。これが格の違いというやつだろうか。国立万歳。

とりあえず荷物を床にやって、ベットに飛び込む……おとお、なんというモフ感。これは間違いなく高いベット&羽毛布団。

「誰かいるのか？」

突然、奥から声が聞こえた。ドア越しなんだろう、声にどくどくの曇りがある。そういえば全部の部屋にシャワーがついてるとか……ん？

「ああ、同室になったものか、これから一年間よろしく頼むぞ」

嫌な予感しかない、

「こんな格好ですまない、私は篠ノ之ほ—————」

「—————箒」

シャワー室から出てきたのは、6年ぶりに再会した幼馴染だった。

「……………」

きょんとした顔の箒。当然のように一夏もきょんとしている。

「い、一夏……」

「お、おう」

きまずい、それに目の行き場困る状況だ。

「っ!?!・・・見るな!」

箒は体を隠すようにタオルをきつく巻いている。

「なんで、ここにいる」

ぎこちなく聞いてくる箒。

「いや、俺もこの部屋なんだけど――」

そこからの展開は早かった。超速だ。さすが全国剣道大会優勝者。

箒は即座に壁に立てかけてあった木刀を取ると、くるりと一回転し、上段打突の構え、そこから基本に忠実な低腰短歩で間合いを詰めてくる、

――――って、死ぬ!

「うおおっ!?!」

一夏はベットから飛び降りすぐさまドアへ・・・

ドアを開けると、そこに海斗がいた。すぐさま海斗のうしろに隠れると、

ズドンッ!

木刀が壁から飛び出して海斗の額に命中していた。

「おゝゝい、大丈夫かゝ」

だめだ、完全に気絶している・・・

それからはその騒動で女子があつまってきたり箒をなだめたり大変だった・・・

そんなことがあったせいかな、箒はどうも昨日から機嫌が悪い。

「だから箒——」

「な、名前で呼ぶな」

「……篠ノ之さん」

「……」

こんどはぶすつとしてしまった。

なんでだ？

「一夏、おはよう……」

そこには、あからさまにおなかが減ってますよてきな感じをだしている海斗がいた。

「お、おはよう……どうした？ 顔色が悪いぞ」

そこで海斗は理由を話した。どうやら昨日は食事がギリギリ間に合わなかったらしく昨日の晩飯はぬきだったらしい。一通り話終わると、ものすごい勢いでご飯を食べ始めた。

と、そのとき

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグランド十週だからな」

鬼だ……なんせこのIS学園のグランドは1週5キロもあるそれ

を十週なんかしたら死んでしまう。

そんなことを考えながら一夏も急いで口に朝食を運ぶ。

（ISの勉強もしなきゃな）

来週のセシリアとの戦いに備えてそんなことを考えていたのだが・
・

それは、1時間目が終わって結論がでた。

—————結論。「「なんとかかなりそうもない」「一夏と海斗の嘆きは教室中こだました、

ゴツッ！

出席簿の音も教室中に響いた。

第5話 寮での悲劇（後書き）

なかなか話が進まない・・・

感想などがありましたら大歓迎です。

第6話 修行!?! 箒の秘密の特訓(前書き)

紅葉が全然喋ってないというか登場少ないことにきずいた。

今回はちょっと長いですが、最後まで見てください。

第6話 修行!?! 箒の秘密の特訓

放課後、寮までの帰り道、歩いているのは世界で2人しかない男子のIS操縦者、織斑一夏と結城海斗だ。

「授業が全く分からん・・・」

「そうだな、単語の予習をしているからなんとかついていってけるんが・・・」

普通に私立高校を受験しようとしていた一夏と中一の冬にいきなり家を飛び出していった海斗はまったくといっていいほどISのことを知らない。他の生徒は入学前から予習しているから大丈夫らしい。

「このままじゃ、セシリアに勝つどころか戦いにさえならないんじゃないか?」

「かもな、ISの知識はまったくなく、しかも、ISの稼働時間もかなり少ないんじゃない・・・」

勝つことは絶望的に思えてくる状況だな、心の中でそう呟く。

「そういえば・・・」

「一夏のISはどうなってるんだ?」

海斗は思い出したように一夏に質問した。

「ああ、それだったら、政府が専用機を用意してくれるらしいって千冬姉が言ってたぞ」

「この時期に専用機か・・・」

代表候補生でもないのにこの時期に専用機専用機というのは異例なことだ。

そもそもISは全部で467機しかない、ISのコアはブラックボックスみたいなもので篠ノ之博士しか作れない。篠ノ之博士というのは箒の姉ちゃんだ。話が逸れたが、つまり、ISは限られた数しかなく、どこの国にも企業にも割り振られた数のうちで研究・開発・訓練をしているらしい。

そのなかの一つをどこの国の代表候補生でもない一夏に用意するらしい。とにかくすごいことだ。

「そういう、海斗はどうなってるんだ？」

「うん？・・・なにが？」

「いや・・・ISのこと」

「それなら————」

そういうながら右手につけているブレスレットをみせる。

え〜〜〜！と驚く一夏。どこで手に入れたんだという問いかけには

「家を飛び出した2年間にちよつとな・・・」
としか答えない。

俺の専用IS『蒼月』そうげつこいつは俺が得た初めての力、みんなを守る初めての力・・・。

世界が初めて男子でISを動かした織斑一夏の登場を騒いでいる頃、俺はあるIS研究所にいた、なんでも紅葉に見せたいものがあったらしい。俺と紅葉は篠ノ之博士と面識があった。紅葉は篠ノ之博士に色々教えてもらっていた。だから、ISに関しては紅葉は誰より知っていた、だから度々ISの研究所に来ることがあった。

その日は新しいISのことを見てほしいということだったのだが暇だった俺は、研究所のなかをうろついていた。ぶらぶらしているとある倉庫にたどり着いた。そこは使わなくなった機材などが置かれていた。

その中に、それはあった。蒼色の装甲に黒色のラインがはいったそ

それはあった。それに吸い寄せられるように俺はそれに触った、その瞬間俺の世界が変わった気がした。

「あなたたち、専用機が用意されるんですね。安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとはおもってはいませんでしたけど」

相変わらず、上から目線のセシリア。さっきから一夏にエリートだな馬鹿にしているだのよく喋ってるな、相変わらず一夏もよく対応しているな・・・まあ、適当にあしらってるんだが、

「まあー、よくあれだけ喋ってられるよなセシリアは・・・なあ、そう思うだろ紅葉」

突然話を振らた紅葉はびくっぴりしていたが、

「私もそう思うが・・・」

紅葉の言葉が途切れた時、教室では箒がものすごい視線で一夏とセシリアを睨んでいた。

なんでも、一夏に名前と呼ばれて睨んで、セシリアには篠ノ之博士の妹だということいわれて睨んでいるという。

「……まあ、セシリアに目をつけられている、一夏に同情するがな」

まったくだ。すると、セシリアとの会話が終わったのか一夏は今度は箒と喋ってる。

「他に誰か一緒に食堂にいかない？」

一夏が言った瞬間、女子が何人か集まり、教室を出て行った。

「俺たちも行くか、じゃあ紅葉、一緒に行こうぜ」

「わかった。IS学園に入ってからまともに海斗と食事しなかったからね」

そのとき、廊下から、

ドシッ！

「相変わらず、一夏と箒は仲がいいことで」

「あれの、どこを見て行っているの？」

紅葉の問いかけに俺は、

「全部」

きっぱり答えてやった。紅葉はなんかずっこけたが……まあ、いいか。

「うりゃーーーーー」

俺は今、剣道場にいる。なんでいるかって？それは――

「どうして、ここまで弱くなっているんだ2人とも！！」

時間は放課後、俺の目の前には箒が防具をつけてたっている。

「受験勉強してたから、かな」

「中学の時は何部に所属していた」

「「帰宅部」」

一夏と海斗の声が重なった。

「鍛えなおす！これから放課後、3時間みっちり稽古をつけてやる
2人とも」

「お、俺も！？」

「あたりまえだ！！」

俺のすっとんきよな声の返答に箒が答える。

なんでこんなことになったのかは昼休みにまでさかのぼる……

「ねえ。君ってさあ、噂の子だよね」

昼休み、一夏は箒と一緒にいた。そこに3年生がしゃべりかけてきた。

「代表候補生と対戦するってきいたんだけど……よかったら、私がISおしえてあげよっか？」

一夏にとっては好都合ことでISの稼働時間が短いだけに、3年間ISを動かしてきている3年生が教えてくれるというのわありがたい話だったが……

「結構です。私が教えることになってるんで」

「あなたも一年でしょ、だったら私の方が————」

「私は、篠ノ之束の妹なので……」

さすがの先輩もこれには勝てなくあえなく退散していった。

「箒、なんだ教えてくれるのか」

「そういつている」

ともあれこれでISを教えてくれる人は確保したな。

「今日の放課後」

「剣道場に来い、一度、腕がなまってないかみてやる・・・それと、海斗も呼んで来い。あいつも一緒にみてやる」

という感じで今俺も絶賛稽古中なわけで・・・

「織斑君と結城君って結構弱い？」

なんて声まで聞こえてくる。

「たしかに、このままじゃいけないな」

すると、海斗は立ち上がり、

「さて、久しぶりにトレーニングするか、一夏」

「おう！」

ちなみに、箒はというと、さっきの会話の後、海斗たちを一瞥して更衣室にいつてしまった。

（すこし、きつく言い過ぎただろうか？）

久しぶりに会った幼馴染だというのに、あんなこと言って大丈夫だったのかと心配になる。

6年ぶりにあった幼馴染はずいぶん変わっていた、特に一夏が・・・格好よくなった・・・

（違う、違う私は決してそのような・・・）

赤くなった顔が映っている鏡をみていると、
(よくわかったものだな私だと)

9歳からの6年間もたっていたのに私の顔を・・・

「ふふふっ」

それが妙にうれしい、しかも、今度から、一夏と一緒に・

「いや、そのようなことは考えてないぞ」

「故に、これは正当だ」

なにをもって正当なんだろうか・・・

広い更衣室で一人拳突き上げている筈だった。

第6話 修行!?! 箒の秘密の特訓(後書き)

やっと、次はバトルに行けそうです。

戦闘シーン書く自身がない……でも、がんばってみます。

それじゃ、さようなら～

第7話 白式VSブルー・ティアーズ（前書き）

やっとバトル突入！！

バトルシーンはうまくはありませんが最後まで読んでくださってうれしいです。

第7話 白式VSブルー・ティアーズ

「――なあ、箒」

「な、なんだ」

「ISのことを教えてくれるんじゃないのか？」

「・・・・・・・・」

「目・を・そ・ら・す・な！」

今、一夏達がいるのは第3アリーナのAピットだ。今日は、セシリアとの対戦の日だが・・・

「しかたがないだろう、お前のISも届いてなかったのだから」

「それもそうだけど・・・って、基本的なこととかあっただろう」

あれから1週間、みっちり剣道の稽古はつけてくれたがISのことはまったく教えてくれなかった。

ちなみに、一夏のISはまだ届いていない。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

ものすごい勢いで走ってきたのは山田先生だ。

「届きました。織斑君の専用IS！」

「織斑、実戦でものにしろ。アリーナを使用できる時間は限られているんだからな」

そこに立っていたのは鬼教官の千冬姉だった。

バシンッ！

「誰が、鬼教官だ」

うわっ・・・本気で怖い・・・

「そんなことより・・・」

箒と山田先生が一夏の腕をつかみ、

「「はやく」」

箒と山田先生に腕をつかまれて引きずられていった。

「おっ、ようやく来たか」

海斗はドアから入ってくる一夏をみる。

「なにやってんだ・・・一夏」

ドアから入ってくる一夏は箒と山田先生に無理やり引きずられていた。

それから一夏は自分の専用IS『白式』を装着する。

「箒・・・行ってくる」

そう告げると、一夏は飛びだって行った。

ちなみに俺の出番は次の試合なのでここでゆっくり観戦することにする。

「あら、逃げずにきましたのね」

セシリアはまた腰に手を当てながら上から目線で言ってくる。

セシリアの専用ISは鮮やかな青い色の『ブルー・ティアーズ』。その外見は、フィン・アーマー四枚背に従えて、どこか王国の騎士を思わせる。

「最後のチャンスをあげますわ。今謝るなら、ハンデをあげても構わなくてよ」

「ハンデなんかいるかよ！」

「そう・・・残念ですわ」

————警告、敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認。初弾エネルギーギー装填。

「お別れですわね！」

キュイーン！耳をつんざくような独特な音。それと同時に走った閃光が刹那、体を撃ちぬく。

一夏とセシリアの対決を別室でモニターしているのは、海斗と紅葉、箒と山田先生そして、千冬姉さんだ。モニターに映ってるのは一方的な攻撃を受けている一夏だった。

一夏はギリギリで持ちこたえてるようで、シールドエネルギーがほとんどなかった。

だが、一夏はセシリアの戦略がわかったようで余裕の表情だった。

「あの馬鹿者、浮かれているな」

千冬姉さんはそう言うのと、忌々しげな顔をしていた。

「え？ どうしてわかるんですか？」

「さっきから右手を閉じたり、開いたりしているだろう、あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

さすが、千冬姉さんそこまで一夏のことを……

「へええええ……さすがご兄弟ですね」

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな」

「あ、照れてるんですかー？」

そう言った瞬間、千冬姉さんのヘッドロックがきまり、苦しそうに山田先生が騒ぐ……なんていうか、変な光景だな。また、モニターに目をやる。

目を離していた間、試合は大きく動いていた……

一夏は3基のビットを破壊し、4基目を回し蹴りで吹き飛ばしてセシリアの懐にとびこんだが……

スカート状の部分から突起物が外れていた、

6基目のブルー・ティアーズ、それは今までのとは違うミサイルだった。

ヴァン！

ミサイルは一夏に命中した。

だが………

「————ふん」

黒煙が晴れたとき千冬姉さんは鼻をならした。

「機体に助けられたな、馬鹿者め」

黒煙の中から現れたのは初期化と最適化フォーマット フィットングが完了した白式だった。

新しく形成された装甲はまだぼんやりと輝きを放っている。それは、

さっきまでの実体ダメージがすべて消えそれどころか洗練された形へと変化していた。

「ま、まさか……ファーストシフト一次移行！今まで初期設定だけの機体で戦っていたっていうの？」

まあ、これでやっとこのISは俺専用になったわけだ。

武器を呼び出す————

————近接特化ブレード『雪片弐型』

千冬が使っていたのと同じ武器……

「ああ、まったく思い知らされるよ」

「俺は世界で最高の姉さんをもった」

これから————

「おれが家族を守る」

「……は？な、に言っ——」

「とりあえず千冬姉の名前を守るさ」

「だから、さっきからなにを……ああもう、面倒ですわ！」

そう言った瞬間、ビットが飛んでくる。

（見える……！）

ギンッ——！

横一閃。だが慣性で一夏の横を通り過ぎ爆ぜる。そして、再度セシリアに突撃していった。

「おおおおっ！」

手の中でエネルギーが増していくのがわかる、刹那、雪片の刀身が光を帯びより強い力を伝えていた。

（いける……！）

懷に飛び込んだ一夏は下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

それがセシリアにあたりそうになったとき――――

『試合終了。勝者――――セシリア・オルコット』

こうして一夏は負けた。

第7話 白式VSブルー・ティアーズ（後書き）

また、海斗が・・・

うまく、戦闘シーンが書けない・・・

感想やアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

第8話 蒼き月VS蒼い雫（前書き）

今回はちょっと長めですがよろしくお願いします。

バトルが今回のメインです、至らぬ点がございましたらこめんとよろしくいねがいます。

第8話 蒼き月VS蒼い雫

「よくまあ、あれだけ持ち上げてくれたもんだな、この大馬鹿者！」

一夏は今、絶賛説教中なわけで、

「まあ、一夏もはじめての実戦だったわけだしもうその辺で……」
「俺は、おそろおそろ聞いてみる。」

「まあ、今日はこの辺でいいか……」

すこしため息混じりに言うと、そのまま戻っていった。

「はあ、結局俺はなんで負けたんだ？」

そんな一夏の疑問に紅葉が答える。

「白式の武装の雪片式型には『バリアー無効化攻撃』が備わっている、それによってISの『絶対防御』を発動さて、いつきにシールドエネルギーを削ることができる。しかし、威力が強いかわりに自分のシールドエネルギーを攻撃に転化させるんだ。だからあの時、白式のシールドエネルギーが0になったんだ」

紅葉の説明を頷きながら聞いているのは箒ただ一人だけだった。当の本人は、

「へ、へえええ」

「一夏、わかってないだろ」

箒のツツコミになにも言えない一夏。もちろん俺もあまりわかってない。

「さて、そろそろ俺は行くな」

「ああ、頑張ってこい」

俺はセシリアと対戦するためにピットに急ぎながらさっきの一夏とセシリアとの試合を思い出してみる。

セシリアは中距離射撃型らしい、だから一夏の白式は相性が悪かった、しかし、逆に考えてみれば懷に飛び込みさえしたら攻撃は通るってことだ。

「まあ、俺はISのことはあまり知らないしな」

俺や一夏は千冬姉さんにIS関係のことについて一切関わらせないようにしてきた。

俺がISを動かしたのは、1ヶ月前に20分間だけだ。対してセシリアは300時間はいつてるだろう、

ここまでの経験の差がありながら、さっきの試合では一夏がもう少しのところで追いつめていた。

セシリアは完全に一夏をなめていたからあの結果だったんだろうが、しかし、次はいくら相手が素人でも手を抜いてはくれないだろう。そうなった場合、俺が勝つ確率が低い。

「でも、そのほうが燃えるしね」

俺は、ピットに入り。右手を突き上げ、その手にあるブレスレット

に呼びかける。

「行くぞ！『蒼月』！」
そうげつ

俺の体を光の粒子が包む、そして、それは姿を現す、蒼い装甲に黒のラインがはいったそれは、俺が手に入れた力、誰かを守る力。

「じゃあ、いつてくる」

「ふん、せいぜい一夏大馬鹿者みたいなことにならんようにな、馬鹿者」

もっと別の呼び方はないのかよ！？・・・・まあ、千冬姉さんらしいな。

そう言ったのが終わると同時に俺はピットを飛び出した。

今、俺の前にはさっきの試合で破損した部分を修理してきたセシリアがいる。

「さあ、これで決着にしようか」

「ええ、さっきみたいな失敗はしませんわよ」

「まあ、できるなら手を抜いてくれるんなら、そっちがいいんだけどな」

俺は、近接ブレードの『蒼鬼』を呼び出す、セシリアも『スターライトmk?』を呼び出している。

次の瞬間、俺はセシリアめがけて突っ込んだ。しかし、セシリアはなんなくかわし、BT兵器『ブルー・ティアーズ』で反撃してくる。その攻撃を躲そうとしたが全部は躲し切れなかった。

————ダメージ30。シールドエネルギー残量570。実体ダメージレベル低。

（そう簡単に攻撃させてくれないか）
そう呟くと、またセシリアめがけて突進した。

「結城君、さっきから同じ行動ばかりしてますね」

海斗に試合をみていた山田先生が不思議そうに言ってくる。

「あいつはなんらかの考えがあるんだろう。あの行動も意味が・・・あるものだと信じていたい」

はあくため息をつくと改めてモニターに目をやる。

ビットの攻撃を躲しながらセシリアに突撃していくが、ことごとく躲されて反撃を食らっている。

「なんで、あいつはほかの武器を使わないんだ？」

そんな一夏の問いに答えるのはもちろん紅葉である。

「海斗のIS『蒼月』の武装『雷電』は威力が絶大な大量のエネルギーをつかうからないつもはできるだけつかわないようにしている。『雷砲』は威力はそこそこだが、複数の相手には有利のはずなんだけど——」

紅葉が言うのと同時に、海斗が『雷砲』をセシリアに撃った……はず。海斗が撃った弾丸はセシリアにかすりもしなかった。

「——まあ、海斗は中遠距離ではかすらせることもできない、だから、つかわないんだ。」

「「「なるほど」「」」

紅葉の説明に一同、頷く。

「でも……あの機体には決定的な弱点がある」

「じゃ、弱点？」

「あの『蒼月』は元々、欠陥機として処理されるはずだった機体なんだ。」

「け、欠陥機!？」

紅葉の告白に千冬以外のみんなは驚いている。

「あの機体は、燃費が悪く、どうしても装備があれ以上、開発できなくて結局、欠陥機として処理されそうになったとき、海斗が起動させたんだ。その後、どうにか燃費はマシになったんが、操縦者があれじゃ宝の持ち腐れなんだよね」

「つまり、弱点というのは・・・」

一夏がおそろおそろ聞いてみると、

「ああ、海斗自身と燃費の悪さなんだよね」
ため息混じりのその言葉は半ばあきらめみたいなのが感じられた。

-----シールドエネルギー残量65。実体ダメージ中。

(そろそろ、やばいかもな)

さっきから何度もセシリアの懷に飛びこもうとするが何度やっても駄目だ。

（くそっ、せめて近くまでいけたら）

近距離からの砲撃。それさえ決まればこの試合は一気に逆転することができる。海斗はそういう確信があった。

「ちょこまかとちょこまかと！・・・これで決めますわ」

セシリアはビット全部をつかって攻撃してきた。

飛んできたビットを2基を斬り、後の3基は回し蹴りで吹き飛ばす。

そして、俺は背中のスラスターを全開させた。

もうちょっとで攻撃範囲にはいるというときに最後のビットがこちらを向き、ミサイルを放ってくる。

「一夏と同じように攻撃は喰らうかよ！」

海斗はすぐ回避行動をとるとそのまま、刀を上から振り下ろそうと

「あなたもまだまだ甘いですね」

そういうと、セシリアは近接用ショートブレードを展開させ、海斗に突き立ててそのまま海斗を地面にたたきつけた。

『勝者――――セシリア・オルコット!』

第8話 蒼き月VS蒼い雫（後書き）

今回は海斗メインだったのかな？

感想などあったらコメントよろしくい願います。

第9話 束の間休息!?!／海斗と織斑(前書き)

今回はなんかほのぼの・・・・・・・・じゃないな

第9話 束の間休息！？／海斗と織斑

「というわけで、織斑君、クラス代表決定おめでとう〜」

ぱん、ぱんぱーん。

と、クラッカーが鳴り響く。

「なんでこんなことになってんの？」

一夏は意味が分からないみたいで、さっきからきよろきよろしている。

「なあ、海斗」

「うん？なんだ？」

「俺ってさ負けたはずだよな」

「ああ、たしかに負けたな」

そんなこんな会話がさっきから続いている。理由は今日の一時間目にさかのぼる……

「織斑がクラス代表だ。異論はないな」

S H Rで教壇に立っているのはこのクラス担任であり俺の義理の姉でもある。

「な、なんで!？」

一夏は驚いたように立ち上がり千冬姉さんに抗議している。まあ、無理だろうけど……

「私が辞退してさしあげたのですわ」

そいったのは、いつもの腰に手を当てた格好をしているセシリアだった。

俺と一夏は先日このセシリアにI Sでこてんぱんにされたのである。

「このセシリア・オルコットが相手だったので負けるのは当然ですわ、そこで、一夏さんにクラス代表を譲って差し上げたのですわ。実力を伸ばすには実戦が一番ですからね」

うん? 今、セシリア一夏さんって呼ばなかったか? まあ、どうでもいいか。

そんなことがあり、今『祝 織斑君代表決定おめでとうパーティー』が行われているわけで……

「織斑君、セシリアさん一緒に写真撮らせてくれないかな」

そうやって来たのは、2年生の写真部部長の黛薫子だった。

さっきから一夏やセシリアに質問しているのだが、質問を返しても、

「あ、そこ適当、捏造しとくね」

と言い続けている。あれでいいのか……。

なぜかセシリアは顔が赤かったが、気にする必要はないだろう。

パーティーはなんやかんやとその後、10時まで続いた。

「案外、疲れたな」

俺は部屋に戻り、ベットに腰かけた。

「そうか？ 私は楽しかったけど」

「いや、パーティーは楽しかったけど、別の意味で疲れた」

俺が言う別のものとは、パーティーの最中、ここぞとばかりに女子が質問攻めをしてきたので色々と疲れた。まあ、昨日は千冬姉さんずつと説教されていたからな、それと比べればなんてことはないんだが。

紅葉とは結局あの事件のあと、一緒の部屋のままになった。もちろん一夏と箒も一緒の部屋だ。

部屋が用意できず、さらに山田先生のミスでこんな部屋割りとなったが今更変えなくてもいいという、箒と紅葉からのお願いだったので山田先生と千冬姉さんは承諾した。千冬姉さんの去り際に、

『変な気を起こすなよ馬鹿ども』

変な気とはなんなのかわからないが、まあ、今はこうして紅葉と一緒に同居しているわけだが……

紅葉とはここに来る前から一緒だったので別に気にしていない。

「そういえば……」

紅葉がふっと何かを思い出しように言ってきた。

「おまえと織斑姉弟はどんな関係なんだ？」

「あれ？言ってなかったけ？」

「あれは、たしか……9年前だったか？」

俺は9年前、織斑家の前に倒れていたところを千冬姉さんに拾われた。なんで俺がそこに倒れていたのかはわからない……いや、覚

えてないといった方が正しいな、俺は千冬姉さんに拾われて、織斑家で過ごし始める前の記憶がない。覚えていたのは自分の名前くらいだった。俺がどこから来たのか、俺の両親がどんな人なのか知らない。ただ一つ、俺が千冬姉さんに拾われる以前から持っていたダイヤのネックレスは何故か大事にしている。何故かはわからない、ただ、大切な物だというのはわかる。そうやって、おれは中学1年まで一緒に育てられた。でも、中学1年の冬、俺は家を出て行った。その後、紅葉と出会って、この蒼月を手に入れた。そして、このIS学園で一夏たちと再会したというわけだ。

「なんだか、複雑なんだね」

そんな会話していると、もう夜の11時だということわかり二人とも深い眠りについた。

「ここが、IS学園か・・・」

今は、まだ、一夏たちはパーティーをやっている最中。

ボストンバックを肩に背負った女子がそこにいた。

体型はやや細めで身長はやや低い。

「まってなさいよ、一夏!」

女子はそう叫ぶといそいで走っていた。

深夜12時。

漆黒の景色に似合わない、桜色の髪をした女の子が一人立っていた。

「3年ぶりかな……やっと、会えるね————」

————海斗」

第9話 束の間休息!?!／海斗と織斑（後書き）

どうでしたか。やっと、新キャラ出せそうだ・・・

感想などコメントよろしくお願いします。

第10話 紅葉の怖すぎる趣味／二人の転校生（前書き）

眠い・・・

第10話 紅葉の怖すぎる趣味／二人の転校生

「ふう〜疲れたー」

「まったくだ」

今は、放課後。セシリアとの代表決定戦以降、海斗と一夏は一緒に箸とセシリア達とISの特訓をしているのだが、その教え方がおかしいのだ。

「ズカッ！ドカン！という感じだ」

「防御の時は、右半身の斜め上前方5度傾けて。回避の時は・・・」

という感じなのだ。とにかくわかりにくい、だが、本人の前で言えるわけがなく、今も特訓は続いている。

「今日はとくに色々あったからな」

授業の時、急降下からの急停止ができなく、地面に突っ込んでしまい、その時できた穴というよりはクレーターを埋めなくてはいいけなかったのでかなり疲れた。

「でも、ISには大分なれたな」

「ああ、そうだな」

これだけが唯一特訓の成果である。

「俺はここで、またな」

「ああ、またな」

一夏はそういうと、走ってしてしまった。

「にしても、すごい設備だなここ……」

改めたとみるとその凄さがわかる、国立なだけあって設備はなかなか
なものである。

「あ、おいしい紅葉。なにやってんだ」

海斗見た先には一人で歩いている紅葉がいた。

「海斗か、なにかようか？」

「いや、紅葉をみかけたから」

「なんだそういうことか」

「なあ、なにうやってんだ？」

「ああ、これか？」

紅葉は今大きなバックを持ってる、かなり重たそうだ。

「生活用品でも入ってんのか？」

「いや、この中には私のお気に入りがある」

「お気に入り!？」

お気に入りという言葉聞いた海斗は顔が真っ青になっていく、
「お気に入りって、まさか!!」

ふふふっという不敵な笑みを浮かべた紅葉は、

「そうだ!私の銃のコレクションだ」

あまりにも堂々と発言した紅葉に呆れることもできない海斗。

「おまえ・・・そんなもの持ってきていいのか」

「何をいつてるのかね海斗君。ここIS学園はこの国や組織にも
属さないところだぞ、故に銃を持ち込んでも問題ない!」

(あれは、そういうことか)

紅葉は放課後、妙に急ぎ足で教室を出て行った事を思い出した。

IS学園に来る前は、いろんな所を転々としていたが紅葉のこの趣味により何度も逃げ回った記憶がある。

「で、それはどこに置くつもりだ」

「もちろん、お・へ・や」

「いやいや、あぶないだろう。だいたいなんでこんなとこまでそれ
を持ってくるんだよ」

「え、それはいつでも海斗を撃てるように——って冗談だってば」

海斗が放つ殺気に素早く反応し、弁解する紅葉。

「じゃあ、本当の理由はなんだよ」

「ほ、本当の理由は、その・・・」

顔を赤らめてもじもじしている紅葉。

（本当の理由なんて言えるわけないだろう。だって・・・）

海斗に群がる他の女子どもを蹴散らすためだなんて。

銃で蹴散らすとはなんとも恐ろしいことなのだがそのことを知る由もない海斗は、

「まあ、いいか。でも、普段は隠しておけよ後々めんどくさそうだから」

そう言い終わったかと思うと、

「そうだ。今度、射撃のコツ教えてくれない？いくらなんでも今のままじゃ、恥ずかしいから。頼む、お前、射撃得意だったろ」

海斗はISはもちろん、祭りの射的でさえ一発も当たらないほど苦手なのだ。

もちろん、断る理由もないので、

「いいよ、さすがにあれじゃ、こっちも恥ずかしいから」

「まじか、サンキュー」

「それじゃ、一緒に帰ろうぜ」

「あ、そのかばん持って行ってやるよ」

「重たいけど大丈夫？」

「平気平気、俺は、男だぞ」

その後、海斗が寮についたのはそれから1時間たった後だった。

「織斑君、結城君。聞いた？ 転校生の話」

朝のSHRが始まる前、そんな話題が飛び込んできた。

「なんでも2人もいるみたいで、しかも、二人とも代表候補生なんだった」

なんで今頃、転入してくるのかは疑問だが、代表候補生というのはすごいな。

「私の存在を危ぶんでの転入かしら」

いつものごとく上から目線のセシリア。だが、代表決定戦以降少し棘は無くなった。

「一人は中国の代表候補生で、もう一人は日本の代表候補生だって」

「うん？なんで今頃、日本の代表候補生が転入してくるんだ？」

「私、よくはわからないんだよね」

「でも、クラス代表戦は大丈夫だよ。専用機持ちがいるのは1組と4組だけだから」

「その情報古いよ」

「この、凰 鈴音が代表になったからね」

クラスの入り口で堂々と立っていたその子に一夏は、

「鈴？鈴のか？なにやってんだすごく似合っていないぞ」

「な、何言ってるのよあんたは」

「ぷっ。」

「海斗…なにわらっているのかな」

「ふん、鈴のこと以外なにがあるのかな」

「海斗あんだね——」

ゴツッ！

そんな会話は千冬姉さんのげんこつで妨げられ、渋々、鈴はクラスに帰った。

「今日は転校生を紹介します」

山田先生がドアに向かって合図すると、
ガラッ！

ドアから入ってきたのはきれいな桜色の髪をした美しい女子だった。

「桜野 遥っています1年間よろしくお願いします」

「え？は、遥？」

そこにいたは、3年ぶりに再会した幼馴染だった。

第10話 紅葉の怖すぎる趣味／二人の転校生（後書き）

紅葉が怖すぎるだろあれ。

第11話 鈴と一夏（前書き）

今回は長めですので最後までよろしくおねがいます。

第11話 鈴と一夏

「は、遥がなんでここに・・・」

驚きの色を隠せない海斗。それもそうである、彼女は小学生のときから一緒だった幼馴染なのだ。

「なんでって・・・」

言われた本人は、困ったような顔でこっちを見ている。

「静かにしろ、授業を始めるぞ」

千冬姉さんは騒がしかった教室を一喝し、いつものように授業を始める。

「へえ」。遥、日本の代表候補生なんだ」

海斗と遥は食堂で昼食を食べている。ちなみに、海斗のメニューは

焼き魚定食だ。ちなみに、海斗は手先が不器用なので魚の骨に苦戦している。

「でも、もう3年近くになるのか……」

海斗が織斑家を飛び出してからもうそんな年月がたつのだ。

「でも、海斗がテレビに出てるときはびっくりしたよ」

海斗も一夏同様、男でISを動かせることがわかり、連日テレビを騒がせていた。

ドンッ！

「一夏さん、この方と、つ、付き合ってらしゃるの？」

声がした方向を見ると、そこには、一夏と鈴に箒とセシリアがすごい勢いで何かを言っていた。

「一夏も大変だな」

だが、海斗は他人事なのでほっとくことにする。どうせ、後に地獄を見るのは一夏なのだから。

「でも、遥はいつ、代表候補生になったんだ？」

「海斗がいなくなって、1年ぐらい後かな……」

「そうなんだ。いや、俺がいない間、皆が驚くほど変わっていて驚いたよ」

これは、本当のことだった。海斗が飛び出して行ってる間、一夏はすごく大人びたし、箒や鈴も見違えているみたいに綺麗になっていた。それは、もちろん・・・

「遥も綺麗になったしな」

「え？か、海斗何言って」

海斗のいきなりの発言に顔を赤らめてしまい、顔をそむけてしまう。

「・・・・・・・・そろそろ、いいか？」

この空気に耐えられないと言わんばかりに、紅葉が言ってくる。

「海斗、そろそろこの子と関係を紹介してもらいたいんだけど」

「ああ、ごめんごめん。」

海斗は両手を顔の前で合わせてあやまっている。

「遥とは、小学校から中学まで一緒だったんだ。つまり、幼馴染だ」

次に、遥に紅葉を紹介し始める。

「紅葉は俺が飛び出したあと、色々あって一緒に旅してたんだ」

「一緒に・・・？」

なぜか、遥の声に怒りが混じっていた。

「まあ、これからまたよろしくな遙」

「あ、うん！」

「でね、海斗、話があ——」

「あ、やべえ。もうこんな時間じゃねえか、たしか、次って実技だったよな」

うん、そうだよという答えを聞いた直後、一夏とともに去って行った。

「今日はこの辺にしておきましょう」

「そうだな」

今、織斑一夏は第3アリーナで特訓していた。

「はぁ、はぁ」

「いつも鍛えてないからそんなことになるのだ」

箒の心無い言葉も今の一夏にはどうでもよかった。

今日は、はっきり言って地獄だった。いつも一緒に訓練をしている海斗が今日に限って、

『悪いな。今日は、別の用事がはいつてんだ』

と言って、特訓という名の地獄を回避しやがった。おかげさまで、『打鉄』を装備した箒と、『ブルー・テイアーズ』を展開させたセシリアと同時に戦うはめになった。

「ふう」

そう言って腰を下ろす。場所はアリーナの更衣室。

「一夏おつかれ。はいっ、スポーツドリンクとタオル」

「おっ、サンキュー」

相変わらず、体のことばかりきにしている一夏は、運動の後に冷たいものを飲むのは嫌うので、あえてぬるめのを渡す。

「やっぱさ、一夏。私がないと寂しかった？」

「ああ、遊び友達が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

ガクツつと少しずこけた鈴だったが、すぐ体勢を戻し、話を続けた。

「そういえば、あんたの部屋ってどうなってんのよ？」

鈴の質問に一夏はサラッと答える、

「1025室だけど……なんだ？」

「遊びに来てやろうとしているんじゃない」

「ま、今夜遊びに来るからあんた部屋にいなさいよ」

鈴はそういいながらアリーナの更衣室を後にした。

「そうじゃなくてこうだって」

海斗は今、紅葉による射撃の練習をしていた。一夏と別れた後、紅葉と一緒に別のアリーナで訓練しているのだ。

海斗の撃つ弾は相変わらず、的とは全く違う方向にとんでいった。

「これが、当てられないんじゃ、ISの戦闘の時はもっと当たらないよ?」

「わかってる……けど……」

海斗にしては弱気な返事だ。

「ふふふっ」

この二人の会話を端の方で見ているのは、今日転入してきたばかりの、桜野遙だ。彼女は暇という理由でこの練習を眺めていた。

「やっぱり、海斗は相変わらずだね。昔と今も変わらないな」
などどつぶやいている。

「ふう。今日はこの辺にしとくか」

「ああ、ありがたいな紅葉」

そういうと、紅葉が、

「私は、ちょっと寄るところがあるから先に帰っててくれ」

「わかった」

そんな、なにげない会話の疑問を遙が質問してくる。

「え？海斗って部屋一人部屋じゃないの？」

「うん、そうなんだ。色々あって俺は紅葉と同じ部屋だ」

「あの子と一緒にんだ……」

ズーンという効果音が聞こえてくるような暗い表情になってしまう。
なにかあったのか？

二人はそういいながら寮まで帰って行った。

海斗と遙は海斗の部屋に急いでいた。時刻はそれなりに遅かった。そのとき、

「最っっっ低。女の子と約束を覚えてないなんて、男の風上にも置けないやつ！犬に噛まれて死ね！」

という、声が聞こえたかと思うと、一夏の部屋から鈴が飛び出してきた。

「あ、鈴おまえどうし————」
しかし、鈴はそのままいってしまった。

「あいつどうしたんだ？」

「うーん？なにかあったのかな」
それから先は二人は考えないようにし、部屋に急ぐ。

あれから2週たった今でも鈴の機嫌はなおらないというかあの後、一夏が鈴をもっと怒らしてしまった。

一夏が謝れば話が早いのだが……..
なにしろ、あんなことがあったからな……..

「で、一夏、反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、か、らっ！あたしを怒らせて申し訳なかったとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょが！」

「いや、……..そういわれても、鈴が避けていたじゃねえか」

「あやまりなさいよ」

「だから、なんでだよ約束を覚えていたじゃねえか」

「約束も意味が違うのよ」

「あつたまきた、じゃあこうしましょう次の代表決定戦で勝った方が、いうことをきかせられるというのはどう？」

「ああいいぜ、負けたら説明してもらおうからな」

鈴はとたん顔を赤らめ、もじもじし始めた。

「せ、説明は、その……」

そこまでしか聞き取れなかった。

「いやなら、やめてもいいぞ」

「だ、誰がやめるもんですか。あんたこそ、謝る練習しておきなさいよ」

「誰がやるか、馬鹿」

「馬鹿とはなによ馬鹿とは！この朴念仁！アホ！マヌケ！」

むかつ

「うるさい、貧乳」

あ、やば・・・

ドガアアンツ！

その後、鈴のパンチによってクレーターができていた。

そんなことがあり、まだ仲直りできていない。

翌日、クラス代表戦1回戦 1組織斑一夏VS2組凰 鈴音だった。

第11話 鈴と一夏（後書き）

次は、バトルだ〜〜。

第12話 謎の乱入者（前書き）

今回は、一夏メインで・・・

第12話 謎の乱入者

クラス対抗戦試合当日、噂の新生生どうしの対戦とあってアリーナは満席だった。

（にしても、よくこんなに集まったもんだな）

一夏の目線の先には、鈴とその専用IS『甲龍』がいた。『甲龍』は白式と同じで近接パワー型で、両肩のところにういている棘つき装甲がやたら自己主張している。スパイク

『それでは、両者指定された位置についてください』

アナウンスに促され一夏と鈴は位置についた。

「一夏。今謝るなら痛めつけるレベルを下げてやってもいいわよ」

「ふん、どうせ雀の涙だろ。全力でこい」

鈴は余裕の表情でこちらを見ている。鈴やセシリア達みたいな代表候補生は死なない程度に弄ぶことも可能だろう。だからといって、手を抜かれるのも嫌なのだ。

「ふん、なにがなんでも、謝ってもらうんだからね」

「そっちこそ、俺が勝ったらちゃんと説明してもらうからな」

2人はそれぞれ意気込みを述べたところで、

「それでは、両者試合を始めください」

ブザーが鳴り終わると同時に二人はぶつかり合う。一夏の『雪片式型』と鈴の青龍刀というにはかけ離れたそれぶつけ合う。鈴はそれを自由自在に操って攻撃してくる。

（やばい、このままじゃ消耗戦になるだけだ。ここはいったん距離を取って——）

「————甘いっ！」

甲龍の肩のアーマーがスライドして開き、中心の球体が光ったと思ったとき、

「ぐあっ！」

目に見えない何かに殴られたような感覚があり、地面にたたきつけられていた。

「なんだあれは!？」

モニタールームで試合をみている筈がつぶやく。

「あれは、『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で発生する衝撃それ自体を砲弾として撃ちだす——」

ブルー・ティアーズと同じ第3世代平気ですわと、セシリアが続けるが箒は聞いてはいない。

ちなみに、ここに海斗と遥はいない、海斗は試合が始まる10分ほど前に、階段から落ちて気絶した、遥はその付き添いだ。紅葉は一夏の試合を興味深そうに見ている。

(一夏——)

一夏が攻撃を受けるたびに胸が痛い。セシリアのときより激しい戦闘にただ無事を願っていた。

「よくかわすじゃない。この『龍咆』は砲身も砲弾も見えないのが

特徴なのに」

たしかに、さっきから一切見えない。なんとか躲せてはいるが、いつかは負ける。あの、龍咆は角度などが無制限で撃てる。そして、操縦者の鈴はその能力を高いレベルで会得してる。

一夏は先週、千冬のいったことを思い出していた。

（いや、まだかつ勝機はある——あれなら、鈴に大ダメージを与えられる）

一夏はなにかを確信したような顔になる。

「余裕の顔ね。でも、どこまで続くかしらね」

鈴は言い終わるタイミングで2本の青龍刀を連結した『双天牙月』
で攻撃してくる。それを躲しながら、この1週間で会得した『瞬時
加速』のタイミングをうかがっている。
インクリプション・ブースト

『瞬時加速』は出しどころさえ間違わなければ一夏や海斗でさえ代表候補生とわたりあうことができる。

鈴が『龍咆』を射撃体勢にはいる前に加速体制にはいる、

「うおおおおつ！」

鈴に雪片の刃が届きそうというとき、

ズドオオオオオンッ！！！！

「!？」

ものすごい轟音が鳴り響いた。それは、アリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたらしい。

「い、いったい何が起こっていて……」

すると、プライベートチャンネルに鈴が飛んできた。

『一夏、試合は中止よ。早くピットに戻って!』

突然も出来事に一夏はよくわからない、

「戻って……お前はどうすんだよ」

『私は、残ってあいつを足止めする』

「足止めって、お前はどうすんだよ」

「しかたないでしょ、あんたの方が弱いんだから」

その言葉に一夏は返す言葉もない。

「あぶねえ」

一夏は鈴を抱きかかえ、相手の攻撃を躲す。

「ビーム兵器か、しかも出力がセシリアのISより上だ」

ハイパーセンサーの簡易解析を見終わると

「ば、馬鹿！おろしなさいよ」

「殴るな！————来るぞ！」

うるさい鈴はさておき、煙の中から煙を晴らすかのようにビームを連射してくる。煙のなかから現れたのは、『フル・スキン全身装甲』のISだった。

「お前・・・何者だ」

一夏の問いに乱入者は答えない。

『凰さん、織斑君。いますぐ戻ってきてくださ————』

「俺たちでやります」

山田先生が言い終わる前に、一夏が言った。

『でも————』

「それに、今はほかの生徒の避難を優先させるべきです」

山田先生はそれ以上はなにも言わなかった。

「くっ」

一夏の斬撃や鈴の衝撃砲をことごとく躲す、さっきから同じ攻撃を繰り返しているが、かすりもしない。

「一夏の馬鹿！ちゃんと狙いなさいよね」

「狙ってるつーの！」

相手のスラスターの出力がすごく零距离からの攻撃もかわされてしまふ。

（参ったな）

残りの、シールドエネルギーが60を切った。『シールド無効化攻撃』はあと1回しか出せないだろう。

「なあ、鈴」

「うん？なによ？」

「あいつの動きなんつうか・・・機械じみていないか？なんか・
こう・・・あれ、本当に人が乗ってんのか？」

「なにいつてんのよISは人が乗らなきゃ動かな——」

鈴はそこで言葉を止めた、なぜなら、一夏の言うとおりさっきから
あのISの動きはおかしい、全く同じ動きを4回も繰り返している。
いくらなんでも同じ行動を一寸の狂いもなくできるはずがない、し
かし、今日の前にいる敵はそれをやったのけているのだ。

「じゃあ、仮にあれが無人機だとしたら勝てるの？」

鈴の問いかけに一夏は静かに頷く。

「じゃあ、あれが無人機だと仮定して攻めましょう」

そのとき、

「一夏あ！」

アリーナの中継室にいたのは、箒だった。

「男ならその程度の敵に勝てなくてなんとする」

箒の表情は怒っているようで焦ってるような表情だった。

「・・・・・・・・」

——まずい！

「箒！逃げろ！！」

敵のISは照準を箒に向ける、間に合わな——その瞬間、

ドカッ！！

敵ISがいきなり吹っ飛んだ、一夏は上を見上げるとそこにいたのは、

蒼の装甲に黒のラインがはいったそれは月のように輝いているように見えた。

「すまん、遅れた」

そこには、蒼月を展開した海斗がいた。

「うんで、あいつはなんなんだ？」

海斗はは状況が分かってないらしい。

「説明は後だ——鈴、やるぞ」

一夏の合図で鈴は衝撃砲を発射しようとしたとき、

「なんで、前に出てくんのよ」

「いいから、撃て！」

「わかったわよ、もう」

鈴はため息をつく和一夏に向かって思いっきり衝撃砲を放った。

「オオッ！」

一夏は後ろに衝撃砲の弾丸が当たると加速した——

——
【零落白夜】使用可能。

ISに始めて触れた時の一体感、そして、全身から湧きだす力を感じる。

（俺は……千冬姉を、箒を、鈴を、海斗を、皆を守る）

必殺の一撃はてきISの右腕を切り落とした。

しかし、その反動で俺は左拳を受ける。さらに、零距离からビームを叩き込むつもりらしい。

『狙いは?』

『完璧ですわ』

ビットの一斉射撃をくらい敵のISは地上に落ちた。

『さすがだな、セシリアならやってくれると思った』

『な・・・と、当然ですわ!』

セシリアは顔を赤らめている・・・

「ふうっ。これでおわ—————」

————敵のIS再起動確認。警告! ロックされています。

「!?!」

やばい! 何も準備してない一夏は動くことさえ出来ない。

敵のISの手からビームが撃たれる寸前、刹那、敵ISはなにかによって撃ち抜かれた。

「何がおこって—————」

何がおきているのかわからない一夏たちの前にいたのは、白銀のISだった。

「お、お前は—————」

海斗がそういうのと同じタイミングで、そのISは手にもったライフルで海斗を撃ち抜いた。

第12話 謎の乱入者（後書き）

今回は長かったですですが、読んでくださってありがとうございます。

第13話 白銀のISS桃色の螺旋（前書き）

今回もバトルです。最後までよろしくお願いします。

第13話 白銀のISVS桃色の螺旋

「お、お前は——」

海斗が言うのと同じタイミングで、白銀のISは手に持ったライフルで海斗を

撃ち抜いた——

「あれ？」

なにも起きない、海斗は何が何だかわからない。たしかに撃たれたはずだった。だが、なにも起きない。白銀のISから放たれたビームは海斗のギリギリ横をかすめただけだったのだ。

何がおつこたのか理解すると、すぐさま白銀のISから距離をとった。

『なんなの？あいつ』

鈴がオーブンチャンネルで話しかけてくる。海斗はあいつが何者なのかは知らないがあれにあったことならある。

『わからない・・・だが、敵だということはわかる』

一夏が鈴の問いに答える。たしかにこの状況で話をしてる場合ではないことはわかる。

「おまえ、なんでここにいる・・・目的はなんだ？」

海斗は白銀のISに向かって話しかけているが相手が答える素振りは見えない。とにかく、今は先生の部隊が来るまでこいつをどうす

るかを考えなくてはいけない。

相手の顔はバイザー型ハイパーセンサーで隠れて見えない。

「答えないか……ならこの際関係ねえ！」

海斗は近接武装『蒼鬼』を展開させ、白銀に斬りかかるが、白銀のISは難なく躲し、ビームサーベルを呼び出し海斗に応戦する。

蒼色の光と白銀の光が激しくぶつかる。海斗は『瞬間加速』イクニッシン・ブーストで一氣に距離を縮める、

「これでもくらえ」

海斗はプラズマ集束砲『雷電』と電磁レール砲『雷砲』を同時に展開させる。『雷電』と『雷砲』の4門同時に撃ちだすこれは、シールドエネルギーを使う代わりに爆発的な攻撃力を生みだす。『蒼月』最大攻撃力をほこるそれを、零距离で放つ。白銀のISはアリーナの壁に激突したが、すぐに起き上がりライフルで海斗を狙う、

だが、そのライフルはすでに撃ち抜かれていた。

「は、遥……！」

桜色をしたIS『ローザスパイラル』を身にまとい、スナイパーライフルを展開させている。

「ふう〜。どうにか間に合ったね」

白銀のISはその場からの離脱をしようとしたが、すぐに海斗や遥、セシリアに囲まれてしまう。

「ここからは逃がしませんわ」

セシリアの攻撃をかわしつつ、ビットをビームサーベルで撃ち落としながら、上空に向かって『イグニッション・ブースト瞬時加速』をする。

「逃がさないよ」

遥は展開させている、スナイパーライフルで白銀のISを撃ち落としました。

その瞬間、白銀のISがまばゆい光に包まれた。

「まさか、一次移行！？」
ファーストシフト

光が収まるとそこにいたのは、さらに、輝きを増したISがいた。
輝きを増したISは『瞬間加速』でセシリアに接近すると、ビームサーベルを叩き込む。

「きゃっ！」

「セ、セシリア！」

白銀のISは攻撃の手を緩めることなくさらに遙に攻撃を――――

「甘いっ！」

すぐさま近接専用武器『春風』で応戦する。『春風』はナイフみたいな形状で2本装備されている。

白銀のISはすぐさま距離を取り、ビームライフルを放つが、遙は左腕のエネルギーシールドで防ぐ。

白銀のISはさらに攻撃をしようとしたが、なぜか攻撃止め、アリナから飛び去った。

「あ、待て！」

「深追いはいけないよ海斗」

すぐさま後を追いかけてようとする海斗を遥が止めた。

「今は、先生たちの指示に従おう」

遥はそういうとアリーナに降りていった。

「痛てえ」

一夏は今、保健室にいた。さっきの襲撃事件のあと全身打撲と診断された。ここ1週間は地獄だそうだ・・・痛てえ。

「あ、一夏今いい？」

そこにいたのは鈴だった。鈴は俺よりは軽傷だったようで、今はぴんぴんしている。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

気まずい。ここ数週間ろくに口もきいてなかったから余計に気まずい。

「鈴、そのなんだ・・・・・・・・悪かった。色々とすまん」

とにかく謝った。内容はどうあれ一夏が悪いので謝る。鈴は面食らった顔でみている。

「まあ、私も・・・その・・・ムキになってたし・・・ごめん」
「どうやら許してくれるようだ。」

「あの、一夏。約束のこ——」

「おい、一夏。どうだ体の調子は？」

そこには、海斗が保健室に入ってくるところだった。

（だあああ、なんでこいつは毎回こういうときにくるのよ！）

小学校のときもそうだが、いつも海斗はこういう時ばかりくる。まさに、悪魔である。

「げえっ、鈴なんでこんなところに」

「それはこっちのセリフなのよ」

「はっ！まさか……ごめんな鈴、いいところ邪魔しちゃって」

顔が赤くなり、あわてて訂正しようとしている。

「じゃっ、邪魔者は消えますか……鈴、がんば」

小さくガツポーズし保健室を後にした。

「あ、鈴、何か言いかけてなかったか？」

「い、いやなんでもないから……ははは」

そういうと、鈴はでていってしまった。

「いやゝ。疲れた疲れた」

俺は部屋に着くなりベットにダイブした。

「にしても色々ありすぎて、なんか頭が混乱してきた」

海斗はたいして怪我はしていない。どちらかというと一夏のほうが重傷なのだ。

「一夏は鈴と仲直りできたかな」

そんなことを考えているうちに睡魔が襲ってくる。そのまま俺は眠りについた。

「日向、お前はこいつを知ってるのか？」

千冬と紅葉は今、モニタールームでさっきのIS襲撃事件の映像を見ていた。

「はい。以前のIS研究所襲撃事件の際、奪われたISに間違いありません」

「そうか・・・」

千冬はそういうとモニターに目を移す。

そこには、あの白銀のISが映し出されていた。

第13話 白銀のISVS桃色の螺旋（後書き）

やっと、1巻内容が終わりました。長かった・・・

次も読んでくださいね。

それじゃ、さようなら～～～

第14話 喧嘩はいけません（前書き）

今回は日常？回です。

第14話 喧嘩はいけません

「海斗、今日という今日は許さないからね」

「おお、いいぜ。こっちこそお前との決着つけたかったとこだ」

謎のISの乱入で中止になったクラス代表戦から数日がたった。謎のISと交戦した、一夏と鈴はもちろん、海斗、遙、セシリアは政府や色々なところの取り調べなどがあり、ここ数日大変な日々が続いていたがこのところは大分落ち着きを取り戻しつつあった。

「今日も平和だな」

「あれのどこが平和だというのか」

箒のツツコミには全く反応しない一夏。今日の前では海斗と鈴が喧嘩をしている。一夏や遙は小学生のときから一緒なのでもう見慣れているのだが、セシリアや箒は止めさせようとあたふたしている。

「いつものことだよ、海斗と鈴が喧嘩するのは」

一夏は止める気はなく、ただ二人を眺めているだけだ。一夏は昔、二人の喧嘩を仲裁しようとしたとき大変な目にあっただけでもうほとくことにしている。

「あれは、喧嘩というのでしょうか？」

セシリアが呆れて言っている理由は、海斗たちの喧嘩の仕方にある。毎回どっちかが喧嘩の原因をつくっているのだが、喧嘩のレベルが違うのだ。

海斗は今、どこから取り出したのか木刀で鈴を攻撃している。鈴はというと木刀を簡単に避けている。いつもこの喧嘩は――――

「うるさいぞ、誰だ、こんなにさわいでるのは！」

誰かの仲裁で終わる（その大半は千冬なのだが）。

「この年で喧嘩とは・・・恥ずかしくないのか」

千冬の説教をうけている海斗と鈴は正座で聞かされている・・・
・そんな光景を見て喧嘩だけはしないでおこうと心に決めた一夏だった。

「またこのようなことがある場合は反省文は覚悟しろよ」

千冬はというと職員室に帰って行った。

海斗たちはというと・・・

「こんなことになったのも、全部、あんたのせいだからね」

「なんで俺のせいなんだよ」

という具合にまた喧嘩をはじめそうな勢いだ。

「また喧嘩したらまた、織斑先生に怒られるよ」

遥の一言に二人はピタ！という効果音がついてもおかしくない速さで止まる。

「今日はこれぐらいにしておきましょうか」

「ああ、そうだな」

さっきまでの勢いはどこにやら……。

「さっきの続きなんだけど……」

遥が言いにくそうに続ける。

「ああ、今度の週末買い物に行こうって話か」

ついさっきまでこの話をやってたのだが、

『買い物！行く。行くわよね一夏！』

『ああ、久振りに行ってもいいかな』

『鈴はどうせ一夏と一緒にいたいだ——』

ドカッ！

『痛てえ。何すんだよ鈴』

『あんたが余計なことを言おうとしたからでしょうが』

『本当のことだろうが』

『あんたねえ』

という具合に喧嘩が始まったので話が中断していた。

「俺は、別にいいぜやることないしな」

「私もいいですよ。日本で買い物をしたいと思っていましたので」

「私もいいぞ」

「じゃ、決定だね」

うれしそうに喜ぶ遙。

「紅葉は行くのか」

海斗はさっきから会話に参加していない紅葉に聞いてみる。

「行くに決まっているだろ」

「じゃ、決定だね」

こうして海斗たちは週末、それぞれの思惑を胸に買い物をする事になった。

「では、報告をはじめます」

黒いスーツをきた女はそういうと話をはじめた。

「今回は謎のアンノウンの存在や『例』のやつらの妨害により失敗いたしました」

「まあ、今回は様子見だったし、収穫もあったからいいわ。」
話を言い終わると、女は踵を返していってしまふ。

「また、失敗か・・・スコール」

スコールと呼ばれた女は背後にいる金髪の女性をみる

「あら、ごめんなさい。案外むずかしいみたいなの」
スコールはとぼけたように言う。

「まあ、2年間も行方をくらませていたのをようやく見つけたんだ
焦らずやれ。それで失敗してもらっても困る」

「でも、時間がないんでしょう？ 私たちは9年間も追っているだ
もんね」

「まあ、あなたたちが提示した条件がいいからいいけど」

女は部屋からでていこうとする直前、

「おまえらは『蒼い月』を甘く見ないほうがいい」

スコールにそう告げると、部屋をでていった。

「甘くは見えてはいないけど、しょせんは子供、付け入る隙はいくらでもあるわ」

そういうと、夜の空に輝く月に不敵な笑みを浮かべた。

「調子はどうだ？」

まわりは機械とコンクリートに埋め尽くされた空間に立っている、それを見て女はいう。女は先ほどスコールと話をしていたときとは雰囲気がちがっている。

「はい、問題はありません。後は『例』のものがあれば起動できます」

それを聞いた女は安心したような表情になる。

女の目に映っていたのは、黒い装甲をしたISがあった。

「これさえあれば世界が変わる……この『デスマイズ終焉』さえあれば
な」

第14話 喧嘩はいけません（後書き）

日常ではないなこの喧嘩は・・・。

第15話 やればできる・・・たぶん! (前書き)

今回から新章スタートです。

最後までおねがいします。

第15話 やればできる……たぶん!

ここは、とある公園、そこに俺はいる。人一人いる気配はない。そこにいるのは俺と美しいオレンジ色の髪をした少女。少女は楽しそうに俺と喋っている、そして、俺も楽しそうにその子と喋っている。

「海斗というのは楽しいな」

子供と思えない妖艶な笑みを浮かべて少女はそう俺に言ってくる。

「僕も《 》といると楽しいな」

その子は俺といると楽しいと言ってくる。

「私は海斗のこと好きだよ」

俺はそれになんかあたふたしている。さらに少女は、

「海斗のこと大好き」

少女はさらに追い打ちをかける。

「大好きだよ………海斗!」

「夢か・・・」

最近よく見るファンシーな夢、ここ最近この夢ばかりみる。綺麗な少女が俺に「好きだよ」と言ってくる夢。あんまりに見るもんだから誰かに相談しようと思ったが、あまりにも恥ずかしいのでいまだ誰にも言えてない。

「もう、こんな時間か」

時計に目をやるともう8時を過ぎていた。今日は日曜なので学校は休みだ。今日はみんなで買い物出かけるということなのだが、

「紅葉は・・・さすがに起きているか」

隣のベット……つまり紅葉のベットはもぬけの殻だ。

「朝食を食べるか」

海斗は着替えると食堂に向った。

海斗は遅い朝食をとりながら今日の予定を確認する。10時にゲートに集合でそのまま町にくりだすというのだが、

「大人数で行くのは久しぶりだな」

海斗はただでさえ買い物がすきではなかったため、あまりこういうことには慣れていない。

「海斗おはよう」

海斗に話しかけてきたのは、まだ眠たそうな一夏だった。

「どうした。やけに眠たそうだな」

「ああ、夜、寝れなかったんだ」

まだ、眠たいような目をこすりながら一夏は朝食を食べ始める。ちなみに一夏は焼き魚定食で俺は朝から丼をたべている。

「そういえば、なんで女性陣はあんなに張り切ってるんだ？」

「俺にもそればかりはわからん」

昨日の夜、紅葉が夜遅くまで一人でなにかやっていたのかは知らないが買い物ってそこまで張り切らなければいけないのか？
そんな疑問を頭のなかで浮かべながら朝食を食べ終わっている。

「集合時間にはまだ時間があるから何かやって暇でもつぶすか」

「じゃあ、俺も行くかな」

いつのまにか食べ終わっておる一夏と一緒に海斗は食堂を後にした。

「いやゝ。町に行くのは久振りだな」

今、海斗たちがいるのは町に行くための電車なかにいる。一夏の前に箒、横にセシリアと鈴、海斗の前に遙と紅葉といった席順である。

「そうだね、海斗ってあまり買い物とか好きじゃなかったもんね」

遙はなつかしそうな表情をしている。海斗が買い物が好きじゃない理由は、

『服とか何を買っていいのかわからない』

『待つのが面倒』

『お金がない……』

あきらかに一番最後のが一番の理由だろうが……まあ、そのことは気にせず話を続ける遙や紅葉。さっきからなぜか紅葉と遙は海斗の話ばかりしている。

「私は、小学生のときから一緒に買い物とか遊んでたりしてたよ」

「それなら、私は、一緒にお風呂入った」

紅葉の発言に遙だけじゃなく、一夏たちまでみている、

「馬鹿！ あれはお前が勝手に入ってきただけだろうが」

「でも、そのあと一緒に入ったということには変わらないよね」
あのかきは大変だった、俺が風呂に入っているといきなり風呂に入
ってこようとするのだ。そのときは必死に止めたが、結局、そのま
ま一緒に入っていた………思い出すだけで恥ずかしい。

ゾクッ！

（はっ！殺気）

きずいたときには、後ろに阿修羅を従えた遙がいた。

「カイト、ドウイウコトカナ？」

「いや、待て。誤解なんだ。誤解————」

「あのかきの海斗は……ふふっ」

「紅葉！なんで話をややこしくしてるんだよ」
確実にやばい空気の遙を抑えつつ、紅葉にツツコミをいれる。

「どういふことか説明してね海斗」

「ま、待て、遙。話を聞けばわかるから、だから、待って————
」

電車の中は海斗の悲鳴が響きわたった。

「ひどい目にあった・・・」

「まあ・・・どんまい」

一夏の応援がまた海斗の心の傷をついてくる。海斗たちは町を歩きながらため息を漏らす。今、女子は女子で買い物をしてくるといふことなので今は別行動をしているのだが、さっきの電車はまさに地獄だった。

「遙は怒らせるし・・・今日、俺ついてないかも」

あまりの落ち込みようなので一夏はあることを提案してみる。

「遙にプレゼントをして機嫌直してもらったらどうだ」

「プレゼントね・・・」

海斗は昔からこういうものに疎い。実際プレゼントを買うときは、一夏や鈴、弾などと一緒に行った。

「そうだな。あいつには早く機嫌を直してもらいたからな」

「じゃあ、決まりだな」

そういつて、一夏と海斗はプレゼントを買いにこうとしたとき、

「あれって・・・そんなわけないよな」

一夏はいきなり立ち止まった、海斗の目線の先をみると、

「海斗？なにみてんだ」

「いや、何故か知ってる・・・人がいたから」

「一夏、ちょっと待っててくれないか」

海斗はそういうと一夏をおいてそのまま走り去っていく。

「あ、待て。海斗！」

一夏は走り去っていく海斗を見失わないように追いかけていく。

「どこだ？ たしかにさっきはここに・・・・・・・・」

海斗は先ほど見た顔を知っている人が場所を見わたす、どこにもいない。いるのは普通に一般客だけだ。

「あと、探してないところと言えば……」

裏路地があるが、あそこにいるとは思えない。だが……

「探す価値はあるか……」

海斗は裏路地を見てみるが誰もいな――

「もう逃げられないぞ」

声の方を見ると女の子が大きな黒ずくめの大人たちに詰め寄られている。

「おとなしく、観念し――」

ドサツ！

黒ずくめの男はそのまま動かなかった。

「おい！こんな女の子を大の大人が大勢で……恥ずかしくないのか？」

「貴様はだれだ？」

「おまえらに名乗るとでも？」

そういうと、海斗は女の子を自分の後ろに移動させると、いつでも戦闘ができるように構える。

相手はなんらかの武術でも取得しているのだろう、雰囲気から違う。

（くそっ！この状況どうするか。いきおいよく飛び出したけど・・・
・どうする）

「こうなったら・・・」

海斗は女の子の手を取り、

「走るのみ」

海斗は思いつきって横道から飛び出していく。

「あ、待て！！」

黒ずくめの男たちは、意表を突かれたのか少し遅れて走り始める。

「はあ、はあ、やっと追いついた。おい、海――

――あれ？」

海斗は一夏の声が聞こえていなようでそのまま走り去ってしまう。

「案外、速いんだな。あんたら」

公園まで追いつめられた海斗は、息を切らさず走ってくる黒ずくめの男に冗談交じりで話しかけている。

（さて・・・この状況はどうしたもんかね）

最悪の状況。自分より体の大きい大人が4人。まず、勝てない。だからといってここで諦めるわけもない。

黒ずくめの男たちは、すでに戦闘態勢に入っている。

「仕方がないか！」

海斗が言い終わると同時に、男が攻撃を仕掛けてきた。1人目は攻撃を躲して、顔面にパンチをおみまいする。だが、続けざまの2人目を躲することができずにふっとばされてしまう。

（やべえな）

海斗が心の中でそうつぶやくと、同時に男のパンチが――――

ドガッ！

男はそのまま地面に倒れてしまい動かない。

「まったく。せっかくの休みが台無しじゃないのよ」

そこにいたのは、鈴とセシリア、遥と紅葉だった。

「いやあゝ。助かった。俺一人じゃどうしようにもなくて」

海斗たちは鈴たちが呼んだ警察に男たちを引き渡したあと公園にとどまっていた。

死ぬかと思った。たぶん、あそこで鈴たちが来なかったら今頃……

いや………考えるのはよそう。

「あ、大丈夫だった？」

海斗はおもいだしたように女の子に話しかける。女の子今にも泣きだしそうである。女の子はよく見たら海斗たちとさほど年齢は変わらないように見えた。

「あの……名前なんて言うの？」

「俺は結城海——」

あれ？この子、さっきの見かけた………

ズキッ！

突然頭が痛くなる・・・

（なんだ、突然、頭が・・・）

「————海斗」

名前を言われた瞬間、頭の痛みがなくなる。

（なんだろう？この感じ・・・）

なつかしいようなこの感じ・・・

「————海斗。やっと・・・会えた・・・」

意識を戻すと女のこは突然泣き出してしまっている。

ギュッ！

突然女の子が海斗に抱きついてきた。

「え!？」

「愛してるよ、海斗」

突然の告白に世界が止まった気がした。

第15話 やればできる・・・たぶん! (後書き)

今回は長かった・・・。

第16話 少女と海斗（前書き）

やっと、新章！今回もオリジナルです。

最後までよろしくお願いします。

第16話 少女と海斗

時刻は昼、黒ずくめの男たちとの一件を終えた海斗たちはIS学園に報告しにに戻ったところである。

「で・・・お前らが遭遇した男たちの事はわかったが・・・なぜ、ここにこいつがいる？」

千冬は頭を頭を抱えて大きなため息をもらす、千冬の目線の先には・
・
・

「ここが、海斗の通っている学校？」

「ああ、そうだよ」

「そうなんだ・・・やっぱり海斗がいるところはいいところだね」

「はは、そうだね」

さつきからこんな会話ばかりなのだ。少女は海斗にずっと抱き着いている。抱きつかれている本人は困ったような顔でおどおどしている。

「結城、一つ聞くが、こいつの名前は？」

「それが・・・わからないんですよ」

「わからないとはどういうことだ？」

「俺に聞かれても……」

本当に知らないような顔だったのでそれ以上に追及はしないが、その後の少女驚いたような顔をする、

「え……そっか、海斗は私といたときの記憶がないんだったね……」

驚いた顔から一変、とてつもなくさびしそうな顔になる。いまにも泣き出しそうな顔をしている少女をみて千冬と海斗は一旦は焦るが、逸れた話を元に戻す。

「なぜ……なぜ、お前が海斗の記憶のことを知っている？」

「それは……」

少女は言葉に詰まる。千冬は少女の気持ちを察したのか、それ以上話を続けなかった。

「それはそうと、結城。こいつをここに連れてきたのはいいが……この後は、どうするつもりだ？」

「あ……」

海斗のことだからそんなことは気にせず連れてきたのだろう、すごい慌てている。

「そうだった……これからどうしよう……」

「はあ、そいつのことはこちらでなんとかするからお前はもうかえっていいぞ」

「あ、はい」

海斗は出て行こうとするが、すぐさま問題にぶちあった。海斗から少女が離れないのだ、海斗がいくら離そうとしても少しも離れてくれない。

「ちょ・・・織斑先生手伝って！」

千冬と一緒にあって離そうとするのでさすがに少女はちょっと名残惜いように離れる。し

「そういうば・・・君の名前ってまだ聞いてなかったね」

「え、また自己紹介から？」

「またって・・・」

海斗にはまったく記憶がないことだが・・・

ズキッ！

（くそっ、また、頭が・・・）

さっきこの子に会った時に感じた頭の痛みがまた、海斗を襲う。し

かも、今回はさつきよりも痛みが強い。

そんなことは知らずに少女はやれやれといった感じに自己紹介をはじめる。

「私の名前は、ケイ——」

ドサッ！

「え．．．？」

「おい！大丈夫か？．．．意識がない．．．」

千冬はすぐさま海斗を抱きかかえると、保健室に向かう．．．。

「まだ、目が覚めないのか・・・」

青空が広がっていた空は漆黒の闇に染まっていた。海斗が倒れてからもう3日が経過していた。今だ目を覚ます気配さえ感じさせない海斗。なぜ倒れたのか、なぜ意識が戻らないのかどの医者に見せてもわからなかった。ただ一つわかるのはあの日から千冬が面倒をみている、この少女。限られた人しか知らない海斗が自分に拾われる以前の記憶がない事を知っており、なおかつそれ以前の海斗に会っているという。海斗が倒れた日から千冬と少女は海斗のところに毎日のように通っている。千冬はこの少女が海斗の記憶がなくなった理由をしっていると思っただけだ。どこか暗い表情をするのだ。

「こんな時にだが・・・おまえは海斗にどこであった？」

「・・・・・・・・」

少女は答えない。千冬はさらに強く質問する。

「早く答えろ！お前は海斗とどういう関係だった？」

千冬に圧倒されて、少女は、

「わかった……」

素直に話す。海斗との思い出を……

「海斗と会ったのは、今から9年前、小さな公園だった。私はある理由から大きな組織に追われていた。私は、組織の目を逃れるため小さな町に潜伏していた。そこで、海斗に出会った。最初のうちは無視していたけど、何度も会っている内にちよつとずつ海斗のことが気になっていった。そして、気がついたときには海斗のことが好きになっていた。でも。あるとき組織にそこがばれて海斗がさらわれてしまったの、たぶんそのとき記憶を消されたと思う。これが海斗と私の関係……」

少女はそこまでいうと再び黙ってしまう。この話を聞いた千冬はある疑問が浮かぶ、

（本当に、それだけの関係か？こいつはまだなにか隠しているのか？）

たったそれだけであそこまでなるのか？だが、当の本人が黙っているのですらわからない。

千冬は窓に目を向ける。そこには漆黒の世界が広がっている。

「嫌な空だな……」

千冬は感じていた、これからくる波乱の予感を……。

第16話 少女と海斗（後書き）

主人公いきなり倒れちゃった・・・

感想などがありましたらコメントよろしくお願いします。

第17話 出会い／白銀再び（前書き）

今回は過去の話です。戦闘もちよつと・・・

第17話 出会い／白銀再び

俺は、とある小さな町に住んでいる。なにも変哲のない町、住宅が並んでいるそこはいつも人はちらほらいるだけで普段はあまり人を見かけない。夕方、俺はいつものように家を出て公園にくる。この時間は人が少ない、いつも俺はその時間にその公園に行く。誰一人いないそこは俺にとって秘密基地みたいな感覚だった。俺のまわりには友達はいなくて、つい最近みんな引っ越してしまった。だが、その日は違った。いつも俺しかいないその公園に一人の少女がいる、その少女は美しく、そのまわりだけ違う世界のような気がした。

「ねえ、なにやってるの？」

俺は少女尋ねる。だが、少女は答えない。

「一人なの？」

俺なんか見向きもしない少女。でも、俺はさらに質問を重ねる。

「ねえ、友達になってよ」

初めて少女はこちらの問いかけに答える。少女は驚いたような顔をしている。

「友達……？」

「うん！友達。僕さ友達みんな引っ越して誰もいないんだ。君一人でしょ」

「そうだけど・・・」

少女はどこか暗い表情で答える。

「なら僕と友達になってよ」

俺の言葉に一瞬、驚いたような顔になるがまた、暗い表情に戻る。

「なんで、あなたの友達にならなければいけないの？」

「だって、寂しそうだったから」

「!？・・・私がいつ、寂しそうに・・・」

「さっき」

少女は何も言えない。この子供はなにを言っているのかわらない。寂しいということとはどういうことか、いつも一人だから寂しいなと感じたことがなかった・・・はずだ。

「だから、僕と友達になってよ」

「なんで、私なんかと・・・」

何か引っかかる、この子の言葉になにか惹かれるものがある。なんだろう？こんな感覚は初めてだ。

「なんでって、だって、僕が友達になりたいからかな」

とても簡単な理由。友達になりたい、ただそれだけのことなのだ。

でも、その言葉に少女は強いなにかを感じていた。生まれてきてからずっと友達がいらない自分を友達にしてくれるという彼の言葉はどんな言葉より嬉しかった。

「わかった・・・友達になってもいいよ」

「ホント!? やった」

彼は無邪気な笑顔を見せている、その姿にちよつとだけ少女はドキッとしてしまう。

「そういえば、名前言ってなかったね・・・僕は結城海っていうんだ」

「君の名前は？」

「私の名前は・・・ケイト・マリア」

少女はそういうと、満面の笑みで海斗を見つめる。

「これからよろしくね、海斗」

「こちらこそよろしくマリア」

これが、海斗とマリアの最初の出会いである。

「くっ・・・ここまでとは・・・」

セシリアはB T兵器のブルー・ティアーズを駆使しながら、先ほど学園に侵入してきたI Sと交戦中である。

『セシリア、上!』

遥がオーブンチャンネルで声を張り上げている。

「くっ・・・」

完全には避けきれずに、右肩にビームライフルの銃弾が当たる。

「この前といい、なんなんですかのこいつ？」

セシリアの目線の先には、先日クラス代表戦の時、襲撃してきた白銀のISがいた。

「もらった！」

遥は『春風』を展開させ、瞬間加速で一気に白銀のISとの距離を縮めるが、

「なっ！！」

白銀のISの後ろの装甲から弾丸が発射される。遥はいきなりのとでよけられず、くらってしまう。

「あのIS、どこからでも弾丸を発射できるんですの？」

代表候補生2人相手でも全く歯がたたない。シールドエネルギーは残りわずかである。

授業中いきなり乱入してきたそいつは、圧倒的な強さで2人を圧倒している。

「うおおおおお」

一夏の雪片と相手のビームサーベルが激しくぶつかる。白銀のISは一夏の雪片を躲しながら、徐々に一夏のシールドエネルギーを減らしていく。全身に装備している砲身で死角がないこのISは攻撃を当てることさえ難しい。

さらに、一夏にダメ出しの広範囲攻撃を行う。一夏だけではなくセシリア、遙も攻撃をくらってしまう。

白銀のISはさらに一夏たちに追撃を――――

『はーい。そこまで！S、今すぐ戻ってきて頂戴』

オープンチャンネルからいきなり知らない声が聞こえてくる。

『了解』

Sと呼ばれた少女は、一夏たちに背を向け、飛び去って行く。

一夏達は何がおっこったのかわからなかったが、とにかく助かったことだけはわかる。

「なんだったんだ、あいつ？」

そんな、一夏の問いかけに誰も答えが浮かばなかった。

「また、こいつか・・・」

千冬はモニタールームで今日襲ってきたISも映像をみている。ついこの前に、襲ってきたばかりなのにまた、ここを襲うといことは

「ここに、やつらの目的のものがあるのか？」

千冬の頭に浮かぶ一人の少女。ケイト・マリアという名の少女。彼女が来てからというもの、海斗は倒れたり、謎のISの襲撃など・あらゆる事件がおっこている。

（マリアはこの件に必ず絡んでいる）

なぜか、そう確信している。理由はないのだが・・・

「まったく、やっかいなことを持ち込んでくれたな・・・」

千冬のため息が部屋中にこだました。

第17話 出会い／白銀再び（後書き）

唐突に戦闘が始まるって……

感想がありましたらどんどんコメントよろしくお願いします。

第18話 寝坊助の起床（前書き）

この辺のネタが切れかかってる・・・

第18話 寝坊助の起床

「うおおおおお」

一夏は雪片式型のバリア無効化攻撃で攻撃するが、遥にあっさり躲され、スナイパーライフルの一撃をくらう。遥は瞬間加速で距離を縮めて、

「これで、終わり」

近接武器の『春風』でとどめの一撃でシールドエネルギーがなくなった。

「やっぱ、遥は強いな。さすが代表候補生！」

白式を待機形態にした一夏は、模擬戦を観戦していた箒たちのところに向かいながらそんなことを呟く。

「でも、相変わらず、勝てないわねえ・・・あんた」

「うっ・・・」

鈴の心無い一言にちょっと落ち込む一夏。あの、ISの襲撃事件ことがあった後、千冬やほかの先生たちはなにかと忙しい。専用機もちである一夏たちはいつでもあんな事態に対応できるように、一夏の特訓も兼ねて模擬戦をやっていたのだ。

「さて・・・そろそろ時間じゃない？」

「ああ、たしか海斗のお見舞いに行くんだったな」

海斗が倒れてから5日がたっていた。海斗は未だ目を覚まさず、今はIS学園の病院に入院中である。IS学園の病院といってもIS学園の中にあるのではなく、町の中にあるため、行くときはIS学園を一度でなければいけない。今回は、千冬からOKはもらっている。

「そろそろ、行きますか・・・」

一夏は先に更衣室に行ってしまう。続いて鈴、セシリア、箒、遥と更衣室し向う。紅葉はこの頃、授業が終わるとさっさと帰ってしまう。誰とも話さず自分の部屋に閉じこもってしまうのだ。海斗が倒れたということが相当ショックだったのだろう。そんな紅葉をすこしでも元気を取り戻してもらうため、千冬から海斗のお見舞いにいけと言われたのだ。もちろん、一夏はもちろん、鈴や箒、セシリア、遥も心配している。誰もが海斗のことを心配している。海斗が倒れて以来、クラスの雰囲気まで重たくなってしまった。

一夏たちは電車に乗り込むと、重い空気を放つ紅葉の影響で、一夏たちまで重くなってしまう。

（おい、誰かどうにかしてくれ、この空気）

一夏のアイコンタクトもむなしく誰もこの空気を変えれない。そん

な空気のまま、病院まで来てしまう。

「えーと、海斗の部屋は……ここね」

鈴が海斗の病室に先に入り、一夏たちも続いて入るが、病室に入るなりその光景にみんなが驚いてしまう。

そこには、先日一夏たちの目の前で海斗に大好きといって告白したあの少女がいたからだ。

「……なんで、おまえがいんの？」

思わず一夏が質問すると、

「そんなの……海斗の看病に決まってるじゃない」
あまりにも堂々という少女……なんていうか、ここまで堂々だと逆に清々しい気分である。

「ところで……海斗は？」

話が逸れかけていたのを遥がギリギリで元に戻す。

「ああ、それなら——」

「あ、なんだ、みんな来てたのか」
いきなり後ろから話しかけられて一夏たちはびっくりする。その声の主の方を向くとそこには……

「海斗!!」

そこには、意識がなく眠ったままのはずの海斗がいた。

あの、ISの襲撃事件の後、千冬は政府への対応などで疲れきっていた。海斗の意識も戻らない、2度のIS襲撃事件などいろいろと悩みを抱えている千冬にとってこれ以上の厄介ごとを増やしたくないのだが仕事という名の厄介ごとは時間がたつにつれて増えていく。心から疲れている千冬は職員室の椅子に座る。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・織斑先生大変です。というかい知らせです」

息をぜえぜえ言わせながら山田先生が走ってきた。

「なにか、あったのか？」

千冬は、顔をしかめながらしぶしぶ聞くことにする。これ以上厄介事は増やさないでくれと祈りながら。

「結城君が……結城君が目を覚ましたそうです」

「な……それは本当か!？」

「さっき、病院のほうから連絡が……」

千冬はホッすると、ある考えが浮かんでくる……

（明日、あいつらに話てやるか、相当落ち込んでいたからな）

次の日、海斗が目を覚ましたとは言わず、お見舞いに行けとだけと告げる千冬だった。

「何故、あそこで退却させた？」

「だって、あそこには私たちの目当てのものが無かったでしょう？」

今は深夜、外の景色は電球さえついていない闇が広がっていた。

「だが、時間がない。やつはもうすでに『蒼き月』に接触している。こうしてる間にも事態は着々と進行中なのだ。そのことはわかってもらいたい」

「なんで、あなたたちが『蒼き月』をそこまで敵視しているのかはわからないけど、まあ、いいわ。あそこでSに退かせたのは、これからのことを考慮してよ。ふふっ、心配しなくても『蒼き月』のこ」と『例』のことは確実に成功させてみせるわ」

そう言い終わると、スコールは作り笑いして、

「じゃあね、アルフレッド」

そういうと、スコールは部屋を出ていく。アルフレッドと呼ばれた女は夜空に浮かぶ月を見上げて笑みを浮かべる。そこで、電話のアラームが鳴り響く。

「私だ、そうか・・・『蒼き月』がついに・・・わかった引き続き潜入してくれ。頼んだぞ『H』」

そういうと、電話を切り、そのまま部屋を出ていく。

「Sの調子はどう？」

まわりを機械だらけの部屋でスコールはちょっと不安げに尋ねる、

「前回は、不安定な状態でしたが今回は問題ありません」

「そう・・・」

スコールは自分の目の前にあるコンピューターに目を向ける。そこにはSと呼ばれる少女と白銀のIS
シルバーフリート
『銀の艦隊』が映し出されていた。

第18話 寝坊助の起床（後書き）

やっと、主人公が・・・

感想・アドバイスがありましたら、コメントよろしくお願いします。

第19話 仲がいいことは良いことである(前書き)

今回も頑張ろう。

タイトルが適當すぎる・・・

第19話 仲がいいことは良いことである

海斗が倒れた日から、6日が経過していた。海斗は意識を取り戻し、順調に回復に向かっていった。

「ふぁゝ、暇だな」

海斗は意識が戻ってから、ちよつとの間入院しているのだ。普通の日は、皆は学校があるから海斗本人はかなり暇なのである。

「結城さん。調子はどうですか？」

「あ、佐水奈さん。もう、すっかり元気です」

この人は佐水奈波留、俺の担当の看護師だ。金髪の髪綺麗な女の^{さみなはる}人だ。前に一度、ハーフなのか聞いてみたら本人曰く、父も母も根っからの日本人だと言っていた。あきらかに髪の色が日本人じゃないんだが……。まあ、そのことは別に俺は毎日のように検査ばかりである意味疲れ切っている。

（疲れている原因は他にもあるのだが……。たとえば）

「海斗ゝ。おはよう」

こいつが主な原因だ……。

ケイト・マリア。突然俺の前に現れて、好きだよ、愛しているとかが言ってきて、実は俺の昔のことを知っていると謎の人物だ。俺は意識が戻ったときこのマリアの記憶だけ思い出した。なぜ俺は記憶がなかったのかは今だ不明である。

先日、一夏たちが来たとき、紅葉や遙と色々もめたりして大変だった。

「いつもありがとうな」

「私は、海斗といれるだけで、幸せだから・・・」

毎回こんな感じである。今も佐水奈さんがいるのに・・・こっちが恥ずかしい。その佐水奈さんも笑みを浮かべて出て行ってしまった。・・・ちくしょう・・・

「・・・うん？どうしたマリア」

ふとっマリアの方を振り返ると、ほっぺをブスツと膨らましていた。

「海斗、私がいるのに看護師の方をずっと・・・」

「う・・・」

正直、リアクションに困る。そんな顔されたら俺何もできないじゃないか。

「い・・・いや、違う。これは・・・その・・・」

「ふふふっ」

「な・・・なんで笑んだよ」

「だって、あまりにも可愛かったから・・・ふふふっ」

「かわ・・・かわいい・・・へ！？」

驚きのあまり、声が裏返ってしまった。無邪気に笑うマリアに俺はちよっとドキツとなる。見た目はとてつもなく美人のマリアがこちらに向かって満面の笑みをしっているのをみているとなんだか落ち着くというか、懐かしい気分がしてくる。はきりとした記憶ではないが、俺は昔マリアでどこかの公園で会っている、だから懐かし

い気分になるのかな・・・。

「マリア」「海斗」

うわあああ、やつちまった。これってあれじゃん、テレビでみるお見合いとかいうやつじゃないのか。ますます雰囲気・・・マリアもマリアですごい顔が赤い、普段あんなに言ってるのに・・・。病室中に恥ずかしすぎる雰囲気流れている。

（やばい、なんとかしないとあいつらが——）

ガラッ！

「海斗。お見舞いにきた・・・よ？」

そこにいたのは、遥と紅葉だった。

「なに・・・やってるの？・・・海斗？」

なんでこんな場面で来るのこの人たち・・・。

「久しぶりに、あったと思ったら女の子といちゃいちゃと・・・」
「

「あの・・・紅葉さん？なにをいつてらしゃるんですか？」

紅葉は海斗の質問に答える前に、ポケットから何故かハンドガンを

取り出す、

「死ね」

紅葉が引き――――

バカアアアアン――！

「なんだ!？」

「これは……………」

――緊急放送、今、建物火災が発生しています。建物の
中にいる人はすぐに避難してください。

「火事だ?!?…………でもさっきの音って…………」

海斗はすぐ病室を出ようとするが紅葉と遙に止められてしまう。

「海斗、どこに行く気なの？」

「なに言ってるんだ。これはただの火事じゃねえだろ」

「でも、それは海斗が突っ込むべきところではじゃない」

「だが…………」

「ここは、私が見てくるから、わかった?海斗」

「くっ……」

遥や紅葉の言い分もわかる。先日まで、4日も目を覚まさなかったやつがこんなことに首をつっこむべきではない。

「わかった……」

海斗は素直に遥の言うことに従う。遥は病室を飛び出して、爆発音がした方向に走り出す。

『第1中央病院にて、火災発生。IS学園の出勤要請』

千冬がその報をきいたのは、書類を終えた時だった、

「今すぐ、打鉄・ラファールの出勤許可をとれ、政府には緊急事態

だと伝えておけ」

千冬は出勤要請の対応でいそがしい、せっかく書類が終わったというのに……

（それにしても、第1中央病院というと、海斗たちがいるところか・
・・）

外には出さないが内心ものすごい不安がこみあげてくる。

「山田先生、打鉄やラファールはまだ時間がかかるか？」

「はい。あと30分はかかるかと」

「専用機持ちは今どこにいる」

「織斑君、オルコットさん、凰さんは今町にいるみたいです。桜野さんは第1中央病院の中です」

「では、そのメンバーに先に向かってもらおう」

山田先生はすぐに1年の専用機持ちに連絡する。生憎、2、3年の専用機持ちは出払っている。

「織斑先生！これ！」

山田先生はそういうとディスプレイに映し出す。

「また、こいつか……」

先日、事件を起こしたばかりの白銀のIS『シルバーフリート銀の艦隊』がそこにいた。

第19話 仲がいいことは良いことである（後書き）

何回襲うんだよ白銀のIS！

自分でも驚くほど登場してますよねシルバーフリート

オリジナルキャラ設定 その2（前書き）

キャラ設定2回目です。

オリジナルキャラ設定 その2

名前 桜野 遥

身長 169 cm

好きな食べ物 イチゴ、桜餅

嫌いな食べ物 辛い物

趣味 お菓子作り、

髪は桜色で、長さは短い。海斗と一夏とは小学生のときからの幼馴染。今は日本の代表候補生。

海斗の記憶がないことを知る数少ない人物。小学生のときクラスメイトにいじめられていたがそのとき海斗にたすけてもらったときから海斗に好意を抱いている。

海斗が織斑家を出ていく原因を引き起こしたのは自分だと思っており、中学2年のとき海斗を守るぐらい強くなりたいという思いから日本の代表候補生になった。突然現れたマリアや紅葉にライバル心を燃やしているが、本人曰く、2人に比べまだ海斗と接する時間が短いため出遅れているらしい。

趣味がお菓子作りなだけあって料理や家事は得意だが、裁縫が苦手。鈴と海斗の喧嘩を楽しんだり、海斗のためならお金を惜しまず使おうとするなど普通の人とはまた違った感覚の持ち主である。

専用IS ローザスパイラル

待機状態 桜の花びらを模したアームレット（腕の部分につける腕輪）

世代 第3世代

外見は桜色の装甲で、スナイパーライフルによる遠距離攻撃や春風での近接攻撃など様々な状況で対応できる。機動力、防御力ともに優れており、さらに燃費がいい。下の武装以外に、エネルギーシールドなどがかる。

武装

・スナイパーライフル『デュアルブラスト』

ローザスパイラルの遠距離武器で遠距離でも高い威力をほこる。

・近接武器『春風』

ローザスパイラルの近接武器。小さな刀みたいな形状をしており、2つ装備されている。

・フューゼレイド

ローザスパイラルの要の可変型独立兵器であり。背中部分2つと腰の部分4つに装備されており、攻撃、機動に切り替えが可能。腰の部分はミサイル、レーザー兵器として使用でき、背中部分はエネルギーソードへ切り替えができ、ビットとして使用できる。

6つ全部を機動の方にまわすと『瞬間加速』イグニッションブーストに匹敵するほどのスピードがだせる。

オリジナルキャラ設定 その2（後書き）

紅葉の設定を書かなきゃな・・・

感想などがあったら、コメントお願いします。

第20話 VSシルバーフリート（前書き）

今回は長めです。

近頃、この辺のネタが切れてきている

第20話 VSシルバーフリート

「重い・・・誰か手伝わない？」

「男ならその程度、なんともないだろ」

「一夏は男なんだからあんたが持つべき」

「一夏さん、女にそのような重たいものを持てというのはですか？」

一夏たちは学校が休みということを利用して、町に買い物にきていた。買い物と言っても海斗へのお見舞いの品を買いにきたのだが・・・

「これって、お見舞いの品なんだよな・・・」

高級フルーツセットに小龍包、饅頭って・・・とてもじゃないけどお見舞いの品ではない。

「とにかく、さっさと紅葉たちと合流するわよ！」

ここに来る前、遥と紅葉は先に海斗の病院に行っている。先日、行ったときは紅葉、遥の暴走でとんでもないことになった。

「とにかく、急ごう。また変なことになる前に・・・」

「そうね」

あの時の、紅葉の顔を思い出して一瞬、背筋凍った。もうあんなものはこりごりだ。

一夏が急こうと走りだそうとし――――

ドカアアアアン!!!

ものすごい轟音が町全体に響き渡る。

「な、なにが起こって!?!」

代表候補生である、鈴とセシリアは爆発の原因を探しているが、一夏と箒はポカンとしている。

『織斑君、オルコットさん、凰さん。今、IS学園に緊急出動要請がありました。いますぐ第1中央病院に向かってください。緊急事態ですのでISの使用を許可します』

いきなりの山田先生の通信に一夏たちは驚くが、緊迫した声で告げている山田先生はいつものちょっとドジな山田先生ではなく、一夏は緊張を隠せない。なによりISの使用許可が下りるといことは相応なことなのだ。

「先生、それで私たちは何をすればよろしいのですか?」

『オルコットさんたちは患者の救出です』

「わかりました」

そういうと、セシリアは通信を切る。

「何があったのだ?」

一人だけ状況を理解できない筈。

「今、緊急でIS学園に出動命令がでた」

「やっぱりさっきのか？」

「ええ、そうでしょうね。少なからずただの火災ではないわね。なんせ、私たちに応援を頼むぐらいなもの」

たしかにISを使用するほどの火事・・・そして、さっきの音、確実にただ事ではない。

一夏はISを展開すると、箒にこの場を任せ飛び立った。

山田先生の連絡を受けた遙は病院の屋上に向かう。さっきの揺れからして何かしら起こっている。

「あのISは！」

屋上に上がると、そこにいたのは……

「また……あったね……」

すぐさまISを展開させ、白銀のISと対峙する。

「あなたは何者なの？ 目的はなに？ なぜ、こんなことをするの？」

「……………」

応えない、遥の問いに一切答えない。顔は相変わらずハイパーセンサーで隠れて見えない。

「まあ、答えないなら……落とすだけだね」

遥はスナイパーライフル『デュアルブラスト』を白銀のISめがけて放つ。白銀のISは横に移動し、それを躲すが……

「もらった！」

遥は腰の部分に装備されている、可変型独立兵器『フューゼレイド』のレーザー兵器で攻撃するが、すぐにエネルギーシールドで防がれてしまう。白銀のISは『瞬間加速で接近する、イクニッションブースト』

「くっ……」

遥はそのままエネルギーシールドで相手のビームサーベルを受け止めるが、相手の方がパワーが上のように、じりじりと押され始める。そして、白銀のISの装甲から弾丸が発射され、白い光が遥を包む、ボロボロになったローザスパイラルが落ちていくそれを白銀のISはさらにライフルで追撃をかける。

（や、やばい。あれをくらったら間違いなくだめ・・・）

バァァァン！

白銀のISはレール砲の攻撃を受けて、吹き飛ばされる。

そこには、IS蒼月を展開させた海斗がいる。海斗は遥を受け止め、遥を安全なところに降ろす。

「てめえ・・・何度も何度も・・・いったい何が目的だ」

「・・・・・・・・・・」

「お前は、何者なんだ？」

「・・・・・・・・S」

「S？」

Sと名乗った少女は淡々とした口調で続ける。

「私の任務は『蒼い月』の破壊・・・」

「『蒼い月』の破壊だと・・・」

Sが言った『蒼い月』とは蒼月だろう。でも、なぜあいつは蒼月を狙うのかはわからない。

「あなたとは戦いたくはないの、だから今すぐ、『蒼い月』を渡し

て……」

Sは条件を提示してきたが海斗はそんな要求を聞きはしなかった。

(こいつ……どこかで……)

何か引かかる、どこか懐かしい。マリアの時とはまた違う懐かしさ。

「お前、俺に会ったことがあるのか？」

「それは、言えないんだ……『くう』」

「なんで……その名前を?……まさか!？」

Sはバイザー型ハイパーセンサーの前を開けると、そこには

「久しぶり、くう……」

「なんで、お前が……なんでなんだよ、アキ……」

そこにいたのは――――

『お話はそこまでだ』

話を遮るように女の声がオープンチャンネルから聞こえる。海斗のハイパーセンサーが灰色の装甲のISを捉えていた。

「誰だ、お前」

海斗は女を睨みつけながら言う。

「アルフレッド・バージュだ『蒼い月』」

アルフレッドと名乗った女は、次に悪魔のような笑みを浮かべ、

「あなたのお友達は面白いわね。勝てないのに突っ込んでくるなんて……」

「お前……、みんなに何をした!」

「ただ、死なない程度にたたきのめしただけよ……あ、でも早くしないとやばいかもね」

「てめえ!!」

海斗は怒りをあらわにしている、下からその様子を伺っていた遥でさえそんな海斗に恐怖を覚える。

海斗のあんな顔はじめてみるからだ。

「てめえだけは絶対、殺す!」

怒りがこもった声にアルフレッドは、

「あなたでは友達の仇は討てないわよ」

海斗はそんな話を無視して、ただ、突っ込み、蒼鬼で斬りかかるが、

「ふん……まだ、甘いな」

その攻撃をすぐに躲し、荷電粒子砲を放つ、海斗はその勢いで道路にたたきつけられる。

「ぐはぁ！」

ものすごい衝撃で肺の空気が吐き出され、頭が真っ白なりかけるが
すぐ意識をはっきりさせる。

「終わりだ『蒼い月』」

アルフレッドは海斗に体勢さえ変える暇さえ与えず荷電粒子砲を放
つ、

「やばっ・・・」

ドカアアアン！！

だが、海斗は無事だった。理由がわからない何故無事なのか、あの
距離で荷電粒子砲をくらって無事なわけがない。海斗は困惑しなが
らも、前を見ると、そこには、

「やっぱり、裏切ったか・・・S。いや・・・あいぞめしぐれ 藍染時雨」

「アキ・・・なんで・・・」

アキは弱弱しい声で、

「やっぱり、くうと戦えないよ」

荷電粒子砲の直撃で背中の装甲は破損しており、そこからは真紅の
血が流れている。

「はははははは。笑えるな、これはいい」

アルフレッドの笑い声が響く、

「お前だけは、絶対殺す」

その瞬間、蒼月が蒼い光に包まれる。。、

———
ワンオフ・アビリティー
単一仕様能力『蒼天月華』発動。

第20話 VSシルバーフリート（後書き）

急展開だねこれ・・・・・・バトルは難しいな、やっぱり。

第21話 蒼の覚醒（前書き）

海斗が久振りのバトルです〜。

第21話 蒼の覚醒

「なんなのあれ・・・」

マリアと一緒に病院の外に避難していた紅葉が空中で蒼く輝いていそれを見て言う。蒼月はその装甲と高出力推進翼から蒼い粒子が漏れ出していた。

「綺麗・・・」

マリアの一言がよくわかる。蒼い光に包まれている蒼月はどこか神秘的に見えており、それはまさに、

「蒼い月・・・」

「それが、『蒼い月』の単一仕様能力・・・」
ワンオフ・アビリティー

アルフレッドの前には神秘的な輝きを放つ蒼月がいた。

「・・・」

海斗は無言のまま、アルフレッドに瞬間加速イグニッションブーストで一気に近づき、蒼鬼を横一閃に振る。アルフレッドは蒼月の速さに反応が遅れ防御さえ出来ずに吹っ飛ばされる。海斗は追い打ちをかけるようにアルフレッドを掴み、零距离で雷電と雷砲を同時に放つ、

「な……」

黒煙でアルフレッドを見失うが、ハイパーセンサーで見ると、海斗は蒼月のスラスタに蒼い粒子を集約させそのままアルフレッドに蒼鬼を前に出しながら加速する。アルフレッドは横に瞬間加速イグニッションブーストしながら、荷電粒子砲を海斗めがけ放つが、海斗はそれを後ろに瞬間加速イグニッションブーストして躲す。

「急に動きがよくなった……」

さっきとは全く別人の動きをしている海斗にアルフレッドは驚きの色を隠せない。

無言のままアルフレッドをみる海斗の目は冷たく、そこにはアルフレッドしか映っていない。

大切な物を傷つけられた怒りのなのか、それとも、大切な物を奪われる恐怖なのかはわからない。ただ、さっきまでの海斗の目とは違い、ただひたすら真っ直ぐアルフレッドを睨みつけている。

「『蒼い月』はやはりすごいな……。やっぱ、ここで落とすべきか……」

アルフレッドはそういうと瞬間加速イグニッションブーストで海斗に一気に近づき、腕の部分に装備されている多兵装兵器のビームサーベルで海斗を地面に叩きつけ、荷電粒子砲を続けざまに放つ。

「ぐっ！」

ものすごい衝撃と激痛が海斗の腹の部分に伝わり、意識が飛びそうになるが自分で顔を殴り意識をはっきり保つ。赤い血が海斗の腹部から流れているが、海斗はそんなことを気にせず瞬間加速で接近戦に持ちこもうとするが、荷電粒子砲の連射で近づくことさえできず、海斗は雷砲で対抗する。

「おい『蒼い月』！その程度か、所詮は子供だな。なにも考えずに行動して自滅する・・・まさに、君にピッタリじゃないか」

アルフレッドの笑い声がオープンチャンネルで響いてくる。そんな笑い声を聞いた海斗は無視する。わざと挑発しているだけだ、わざわざ安い挑発にのる必要性はない。

「そろそろ・・・」

アルフレッドは左手の荷電粒子砲を構え、

「落ちろ！！！」
イグニッションブースト

瞬間加速で近づきながら砲撃する。なんとか躲すも、ビームサーベルの一撃をくらい、

「これで・・・終わりだ」

荷電粒子砲が海斗に直撃する直前、何者かが荷電粒子砲を防いでいた。

「ふん・・・まだ動けたのか・・・」

「あなたたちに、くうはやらせない！」

アキはそういうと、ビームライフルを放つがすぐに躲される。

「裏切り者が……」

アルフレッドはそういうと瞬間加速で一気に距離を詰めるが、

イグニッションブースト

「甘い！」

前の装甲から弾丸が発射されアルフレッドに直撃し、そこに、海斗が蒼鬼を上から振り下ろす。

アルフレッドはそのまま地面に叩きつけられるが、すぐに体勢を立て直し海斗たちを睨む、

「S……貴様、裏切ったこと後悔するなよ……」

「くうを敵に回すならこっちの方がマシ……」

「『蒼い月』！お前は私が落とす……」

アルフレッドはそう言い残して去っていく。

ドサッ

海斗はそのままその場に倒れた。

「ここは……」

見慣れない白い天井、そして匂い。横を見ると窓から漆黒の闇が覗いている。

「気がついたか……」

「千冬姉さん……」

そこにはいつもと変わらない表情の千冬姉さんがいた。

「まったく、とんでもないことをしでかしたな」

「なにかしたんですか？」

「ああ、お前たちの戦闘で、病院は半壊、町は一部が破壊された、こちらとしてはいい迷惑だ」

ものすごいことになってるな……

「あ、他のみんなは!？」

「一夏、鈴、セシリアはそこまで重くないが軽傷で済んだ。マリア、紅葉は無傷だった。遥は重傷だが命に別状はない」

「よ、よかった」

みんな無事なんだ・・・

「そうだ、アキは・・・時雨は!？」

「そのことだが・・・今も手術中だ。とにかく、出血がひどい、助かるかどうかはわからないそうだ」

「・・・・・・・・」

海斗の表情が暗くなるのを見た千冬は慌て、

「今回もお前のせいではない。だから、気にはするな、いいな!」

「・・・・・・・・」

海斗は小さく頷く。

「海斗、質問なんだが・・・藍染は敵なのかそれとも味方なのか?」

「わからない・・・ただ、俺を守ってくれた・・・これは事実だから」

海斗はそう言うと、窓をみながら思い出していた・・・

海斗を変えたあの事件、海斗のトラウマを・・・

第21話 蒼の覚醒（後書き）

2巻の内容は、もうちょっと後になると思います。

感想をガンガン（あったら）コメントよろしくお願いします。

第22話 天才と海斗（前書き）

今回はあの人登場！

第22話 天才と海斗

夜、千冬は海斗たちが起こした市街地戦闘の報告書を提出し、職員室に戻ってきたところだった。

「ふうー、まったく・・・あいつらは何回事件をおこせば気が済むんだ？」

クラス代表対抗戦でのアンノウンとの戦闘、授業中に謎のISの乱入など、最近は頻繁に起こっており、そのたび千冬たちは報告書を提出しなければいけないのだ。しかも、今回はこの学園を襲った張本人が入院中というこでとにかく忙しかった。そろそろ帰ろうと思いい椅子から立ちあがったとき、職員室の電話がなったので千冬は仕方なくその電話に出ることにする。

（FAXか・・・だが、こんな時間にだれが？）

こんな夜遅くに誰が？という考えたが送られたFAXを見た瞬間、千冬は表情が引き攣った。

「なんで、こんな時に・・・」

千冬の大きなため息を漏らした。

「結城、織斑、篠ノ之、日向、桜野の5人は今すぐ職員室に来い」

朝のHRが終わったときに千冬に呼びさせれた5人は職員室に向っていた。

「にしても・・・千冬姉さんが朝から呼び出しとは、俺たち何か悪い事でもしたか？」

「千冬姉のことだからげんこつは覚悟しないといけないかな」

「いや、げんこつだけじゃ・・・もしかしたら、外周10週かもしれないな」

「いや、まだ怒られると決まったわけじゃ・・・」

こんなことを話しながら廊下を歩いていく海斗たち。千冬から朝からの呼び出しというこで4人とも緊張していた（主に恐怖）。海斗たちはようやく退院して、2日目のことなのだから心配で、心臓がいつもよりも早く動いているのがわかる。

「失礼します」

海斗たちは一礼し、職員室に入る。

「来たか・・・早速だが、これを読み」

千冬から、一枚のFAXを受け取る。

「えーと、なになに・・・『みんな久しぶり、皆のアイドル篠ノ之東さんだよ。東さんは今、IS学園にいます、今日までに捕まえないと、大変なことになるよ！それと、東さんを捕まえられた人には東さんからご褒美があります。ちなみに、東さんを捕まえられないと、なんと、かつくんは東さんのものになります・・・』
そういうことで、東さんを探してみてね！かつくん、愛してるく
くくく・・・」

読み終わると同時に、海斗はFAXを握り潰した。

「ということで、今からお前らには、この学園のどこかにいる東を
搜索してもらう」

一瞬で海斗たちの空気が重くなる、特に海斗は身の危険を感じとったのか顔が真っ青になっている。

「東さんがここに・・・」

海斗は昔から束から気に入られている（海斗にとって恐怖なのだが）。

「とにかく、急がないと大変なことになる。急げ！どんな手を使っても構わん！」

千冬の指令を受けると、真っ先に海斗が職員室から飛び出し走り去っていった。

「なあ、一夏」

「なんだ、紅葉？」

猛スピードで走る海斗を追いかけながら紅葉は前から疑問に思っていたことを口にする。

「

なんで、海斗はあそこまで束さんを嫌うんだ？」

「それは……昔、とんでもないことがあったからだな……」

「ああ、あのことか……」

箒と一夏の2人ともどこか嫌そうな表情で、顔が引きつっている。

「それは、私も知らないな。私が束さんと会う前のことだからね」

遙も知らない様子なので、もう一度、一夏と箒に目をやる。

「わかったから……だから、その銃はおろして！」

紅葉いつのまにか銃を取出し、一夏に向けていた。

「たしか、あれは……海斗が家にきてから、半年ぐらいだったかな？」

海斗と束の関係……

「昔、束さんが小さいころいじめを受けていたんだ、そいつらは千冬姉がいない時に限って襲ってきていた。その時、毎回のように海斗がその奴らを追い払っていたんだ……そこからの、束さんが海斗のこと気に入ったの……でも」

「でも？」

一夏は言いにくそうに二人に告げる。

「それから、束さんは海斗の隙あれば布団に潜ったりしていた、最初は海斗も嫌がってなかったが、だんだんとエスカレートしていき、最終的に中学1年の夏にいきなり家に来て1ヶ月間、海斗を連れ去ったりしていたから、海斗は束さんがちょっと苦手なんだよ」

「……………」

衝撃告白。遥はあのとときの謎が解けたような顔をしている。紅葉も似たような顔をしている。

「とにかく、今は束さん搜索が先だ」

海斗の後を追って、一夏たちはIS学園の中を走る、走る、走る！

「はあ、はあ、はあ、やっと見つけた・・・」

海斗がいるのは、ISが収納されている倉庫。

「かつくん、会いたかったよ」

いきなり抱き着いてくる束に反応できずに、そのまま押し倒される。

「久しぶりだね、かつくん！束さん、かつくんに会えなくて寂しかったよ」

「いきなり、抱き着くなよ！」

なかなか離れない束を引きはがそうとがんばるがビクツともしない。

「で、今更だけど・・・何しに来た？」

「それは、決まっているよ」

束は大きな笑みを浮かべ、胸を張り、高らかに宣言した。

「もちろん、かつくんを私の者にするため」

その答えに海斗はその場に崩れ落ちた。

第22話 天才と海斗（後書き）

海斗はモテルねえ、

自分でいうものなんだが、

羨ましい！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7412w/>

IS～インフィニット・ストラトス～蒼き月の輝き

2011年10月14日02時57分発行